



Title	近代ロシア正教聖職者教育におけるプラトン主義の起源：ペテルブルク神学大学招聘教授フェスラー追放事件を中心に
Author(s)	下里, 俊行
Citation	スラヴ研究, 62, 73-107
Issue Date	2015-07-15
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/83638">http://hdl.handle.net/2115/83638</a>
Type	bulletin (article)
File Information	62-04_73-107.pdf



[Instructions for use](#)

# 近代ロシア正教聖職者教育における プラトン主義の起源

—— ペテルブルク神学大学招聘教授フェスラー追放事件を中心に ——

下 里 俊 行

## はじめに

従来、プラトン哲学は、伝統的な「正教の霊性」に合致しており、アリストテレス的な西欧哲学とは異なるロシア宗教哲学に固有の要素だと論じられてきた<sup>(1)</sup>。だが、1810年創設のペテルブルク神学大学にドイツから招聘された教授イグナティウス・フェスラー(1756–1839)は、授業でプラトン哲学を偏重したと非難され、僅か半年余りで辞職させられた。このことは、当時、プラトン哲学がロシア正教の公認哲学ではなかったことを示している。そこで本論は、ペテルブルク神学大学の設立経緯とフェスラーの人事の検討を通じて、創生期の神学大学で「プラトン」がいかなる意味を担っていたのかを解明することを目的とする<sup>(2)</sup>。

そもそもペテルブルク神学大学は、アレクサンドル1世による神学校改革によりロシア初の正教徒のための近代的な高等教育研究機関として設立された。改革前の神学校は各主教区が財政を負担し、教育課程も学校毎に不統一だったが、改革後の神学大学は国庫負担により同一の学則に基づき一元的に運営されるようになった。この改革は、世俗国家による聖職者養成機関の直接的規律化を意味しており、同時代のヨーロッパでのポリツァイ(善き秩序)国家の理念による宗教組織の規律化という文脈に位置づけることができる<sup>(3)</sup>。そして、この

1 Frances Nethercott, *Russia's Plato: Plato and the Platonic Tradition in Russian Education, Science and Ideology (1840–1930)* (Aldershot: Ashgate Publishing, 2000), p. 38; Тихолаз А. Платон и платонизм в русской религиозной философии второй половины XIX – начала XX веков. Киев, 2005. なお、以下では傍点による強調は引用文中を含め本論筆者による。

2 従来の神学大学の哲学史研究ではカント受容の分析が中心だった。例えば、Абрамов А.И. Кант в русской духовно-академической философии // Кант и философия в России. М., 1994; Кру-глов А.Н. Философия Канта в России в конце XVII – первой половины XIX веков. М., 2009; Мачкарин О.Д. Критическая философия И. Канта в Санкт-Петербургской духовной академии: критика и интерпретация // Вестник МГУ, Vol. 14. № 1 (2011). 19世紀前半までのプラトン受容史を概観した Мирошениченко Е.И. Очерки по истории раннего платонизма в России: Статьи по истории русской философии. СПб., 2013. は、逆に神学大学の哲学について十分検討していない。日本で最初に神学大学での哲学の重要性を指摘したのは、宇都弥生「ロシアの神学大学における哲学研究」『ロシア思想史研究』第1号、2004年、31–35頁。

3 下里俊行「ある正教神学生の自己形成史」『スラヴ研究』第58号、2011年、95–96頁; Paul W. Werth, *The Tsar's Foreign Faiths: Toleration and the Fate of Religious Freedom in Imperial Russia* (Oxford: Oxford University Press, 2014), pp. 39–42. 他方でこの神学校改革で導入された学則はアカデミックな自治を認めており「リベラルな改革」の産物だと見なす研究者もいる。Тарасо-

改革により1814年に制定された神学大学学則に「プラトンとその後継者」の哲学を優先することが明記されたのである<sup>(4)</sup>。ニコライ・ガブリュシンの説明によれば、学則に「プラトン」の名が盛り込まれたのは、フェスラーが学則起草者のペテルブルク神学大学学長フィラレート（ヴァシリイ・ドロズドフ 1782–1867）に影響を与えたからだという<sup>(5)</sup>。しかし、この学則が制定される4年前に既にフェスラーは神学大学から追放されていたので、ガブリュシンの説明には若干の齟齬がある。それゆえ、ガブリュシンの説明を検証するためにもフェスラーの人事案件の精査が必要なのである<sup>(6)</sup>。

さらに本論がフェスラーに注目する理由は、彼の授業を受講した第1期生（1810–14年在学）とその弟子達が、19世紀前半の神学大学でプラトンを重視した哲学教育の主流を担うことになるからである。例えば、第1期生のイロディオ・ヴェトリンスキイとゲラシム・パヴスキイは母校に残り、ヴァシリイ・クトネヴィチはモスクワ神学大学の初代哲学教授に就任し、その弟子フォードル・ゴルビンスキイも母校の哲学教授職を引き継ぐ。またヴェトリンスキイの弟子で第2期首席修了生イヴァン・スクヴォルツォフはキエフ神学大学哲学教授に赴任し、彼の弟子ヴァシリイ・カールポフはペテルブルク神学大学哲学教授に、同じキエフ神学大学卒のパムフィル・ユルケーヴィチは母校の哲学教授を経てモスクワ大学哲学教授に赴任し、B. ソロヴィヨフをはじめ19世紀後半の世俗での哲学教育に少なからぬ影響を与えることになる<sup>(7)</sup>。つまり、フェスラーはペテルブルク神学大学の初代の哲学教授として、

---

ва В.А. Высшая духовная школа в России в конце XIX – начале XX века: история императорских православных духовных академий. М., 2005. С. 24–25.

- 4 兎内勇津流「アレクサンドル1世期のロシア正教教育改革とプラトン」根村亮編『プラトンとロシア III』[21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集25] 北海道大学スラブ研究センター、2008年、8頁；Проект Устава духовных академий // ПСЗ. Сб. 1. СПб., 1830. Т. XXXII. С. 926.
- 5 ガブリュシンが自分の論拠として挙げたのは、第1にフェスラーが追放された時期にフィラレートが私信でフェスラーの学識を高く評価したこと、第2に後年になって彼が検閲報告書の中でフェスラーの説を「虚偽の教説すなわち神秘主義」と断定することは誤りであると指摘していたこと、第3に彼の晩年の回想でフェスラーが実はイエスの神性を否定していたことを指摘し、そのような見解をもっていた人物を神学大学に招聘した人事担当のミハイル・スベランスキイを批判したことである。Гаврюшин Н.К. У истоков русской духовно-академической философии: святитель Филарет (Дроздов) между Кантом и Фесслером // Вопросы философии. 2003. № 2. С. 137–138. 前2者はフェスラーに好意的な言説だが、後者は逆に批判的な言説である。これらをもってフェスラーのフィラレートへの影響を主張するには無理がある。
- 6 本論では、プラトンの原典に即した哲学としての「プラトン哲学」に対して、それを発展させた思想類型で、感覚世界を超越したアイデアの存在を前提とする形而上学を持つものを広義の「プラトン主義」と定義する。さらにこのプラトン主義に包摂されているが、プロティノスに代表されるような、一者からの存在の流出と存在の一者への環帰を唱えてアイデア界と感覚世界との連続性を重視する思想類型を特に「新プラトン主義」と定義する。
- 7 Шнем Г.Г. Очерк развития русской философии. Т. I. М., 2008. С. 401. 彼らのプラトン観については、下里俊行「19世紀30–50年代ロシアのプラトン解釈の諸相」根村亮編『プラトンとロシア II』[21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集20] スラブ研究センター、2007年；同「1850年代のロシアにおける正教的プラトン理解」根村編『プラトンとロシア III』；下里「あるロシア正教神学生の自己形成史」参照。

その後の各神学大学の哲学講座での師弟関係の連鎖の出発点に位置しているのである。さらに近年の大学史研究の分野では外国人教授の重要性について注目されているが、フェスラーの思想と教育実践を分析することは正教聖職者養成課程における外国人教授の意義を考察する上でも重要である<sup>(8)</sup>。

もっとも、フェスラーの自伝や伝記研究<sup>(9)</sup>では神学大学教授時代への言及がなされているものの、従来、彼は主としてフリーメイソン史との関わりで言及され<sup>(10)</sup>、ドイツでのフェスラー研究も同様にドイツ・フリーメイソン史における彼の役割に焦点が当てられてきた<sup>(11)</sup>。これらを踏まえた近年の研究もやはり彼をロシアでのフリーメイソン会所の改革者として位置づけている<sup>(12)</sup>。他方、哲学史研究ではフェスラーは、カント哲学やプラトン主義のロシアへの紹介者と位置づけられ<sup>(13)</sup>、宗教史では聖書協会との関連で言及されている<sup>(14)</sup>。しかし、本論では、これらの先行研究とは異なり、フェスラーを招聘した側の状況にも注意を払いつ

- 
- 8 Иностранные профессора российских университетов: вторая половина XVIII – первая треть XIX в. Под общ. ред. А.Ю. Андреева, Сост. А.М. Феофанов. М., 2011; R. D. Андерсон (安原義仁、橋本伸也監訳)『近代ヨーロッパ大学史：啓蒙期から1914年まで』昭和堂、2012年；橋本伸也編『ロシア帝国の民族知識人：大学・学知・ネットワーク』昭和堂、2014年。神学大学史としては、*Чистович И.* История С. Петербургской духовной академии. СПб., 1857; *P-ов [Ростиславов Д.И.]*. Феофилакт Русанов: Первый экзарх Грузии // Вестник Европы. кн. 6. 1873. С. 229–258; *Чистович И.* Руководящие деятели духовного просвещения в России в первой половине текущего столетия: комиссия духовных училищ. СПб., 1894; *Тарасова.* Высшая духовная школа. 聖職者史としては、*Тумлинов В.* Духовная школа в XIX столетии. Вып. 1–2. 1808–1809; G. L. Freeze, *The Parish Clergy in Nineteenth-Century Russia: Crisis, Reform, Counter Reform* (Princeton University Press, 1983). 神学史の古典は、*Флоровский Г.* Пути русского богословия. Минск, 2006; *Смолич И.К.* История Русской Церкви 1700–1917. М., 1996. いずれも外国人学者の役割に十分な注意を払っていない。
- 9 Fessler, Ignatius Aurelius, *Dr. Fessler's Rückblicke auf seine siebenzigjährige Pilgerschaft: ein Nachlass / herausgegeben und mit einem Vorworte eingeleitet von Friedrich Bulau.* 2 Auflage (Leipzig: Verlag von Carl Geibel, 1851). 初版は1824年。*Понов, Нил.* Игнатий-Аврелий Феслер. Биографический очерк // Вестник Европы. кн. 12. 1879. С. 589–643; *Тр[убецкой], С[ергей].* Фесслер, Игнатий Аврелий // Русский биографический словарь. Т. 21. СПб., 1901. С. 59–60.
- 10 *Пытин А.Н.* Общественное движение в России при Александре I. СПб., 1885; *Его же.* Русское масонство XVIII и первая четверть XIX в. Пг., 1916; *Его же.* Религиозные движения при Александре I. СПб., 2000 (1-е изд. Пг., 1916); *Серков А.И.* История русского масонства XIX века. СПб., 2000.
- 11 P. F. Barton, *Ignatius Aurelius Fessler. Vom Barockkatholizismus zur Erweckungsbewegung* (Wien, 1969); F. Maurice, *Freimaurerei um 1800. Ignatz Aurelius Fessler und die Reform der Großloge Rozal Zork in Berlin* (Tübingen, 1997).
- 12 *Горбачев Д.В.* И.А. Фесслер: немецкий мыслитель и общественный деятель // Новая и новейшая история. 2012. № 3.
- 13 Franklin A. Walker, “‘Renegade’ Monks and Cultural Conflict in Early Nineteenth-Century Russia: The Cases of I. A. Fessler and J. B. Schad,” *Religion, State & Society* 28, no. 4 (2000), pp. 347–358; *Гагрюшин.* У истоков русской духовно-академической философии; *Кружлов.* Философия Канта. С. 352.
- 14 S. K. Batalden, *Russian Bible Wars: Modern Scriptural Translation and Cultural Authority* (Cambridge: Cambridge University Press, 2013), pp. 19–21.

つ、彼がプラトン主義を理論的に紹介しただけでなく実践的にも正教聖職者養成課程に積極的関与した側面、つまり彼の理論的立場がどのように実践化されていたのかという側面に焦点を当てる<sup>(15)</sup>。さらに本論の主題は「近代化と宗教」という理論的課題をも射程に入れている。すなわち、かつて「近代化」とは宗教文化の世俗化・私事化を推進すると考えられてきたが、近年では「近代化」の途上においても様々な宗教文化の影響力は公的領域においても維持され強化されていたという「ポスト世俗化論」が提起されている。また、ロシア帝国史研究でも正教会のみならず正教以外の公認された諸宗教組織が帝国統治の「紀律化」の一翼を根幹的に担っていたことが指摘されている<sup>(16)</sup>。それゆえ、本論での神学大学教授人事上の紛争の分析は、ロシア帝国の世俗官僚による宗教政策と正教会高位聖職者との間の協調と相克の実態解明に寄与するはずであるし、さらに世俗権力と支配的宗派の双方を超越した次元のあれこれの諸思想が、帝国統治に不可欠な聖職者養成政策の策定にいかなる影響を及ぼしたのかを考査する上で希有な事例研究としての意義をもつはずである。

本論では基本史料としてペテルブルク神学大学教授イラリオン・チストーヴィチが編纂した2つの神学大学史研究を用いる。これらは二次史料であるが資料集的な性格をもっており、フェスラーの授業概要の抜粋など他には見出しがたい独自の情報を含んでいる<sup>(17)</sup>。ただし、チストーヴィチの「正史」的叙述を相対化するためにチストーヴィチの歴史記述に批判的で、独自の伝聞情報を含んでいるドミトリイ・ロスチスラヴォフ（ペテルブルク神学大学卒業生で同大学教授）による筆名での叙述<sup>(18)</sup>を参照するとともに、広範な資料を用いた伝記作家アレクサンドル・ポポーフとドイツ人研究者ピーター・バートンの伝記研究を利用した<sup>(19)</sup>。本論の史料面での独自性は、先行文献がほとんど無視してきた正教会有力聖職者によるフェスラー批判文書の内容を初めて全面的に分析した点である<sup>(20)</sup>。

以下では第1節でペテルブルク神学大学の設立経緯を概観し、その思想的基盤としてドイツのヴォルフ派哲学が重視されていたことを指摘し、第2節ではフェスラー招聘の背景には

15 このことはかつてニコライ・チェルヌィシェフキイが提起し、グスタフ・シペートが示唆したポジティブなフェスラー像をロシア社会思想史に再び定位させることを意味している。*Чернышевский Н.Г. Полное собрание сочинений*. Т. 3. М., 1947. С. 178; *Шпет*. Очерк. Т. I. С. 189–191.

16 ポスト世俗化論は、J. Butler, J. Habermas, C. Taylor, C. West, *The Power of Religion in the Public Sphere* (New York: Columbia University Press, 2011); Batalden, *Russian Bible Wars*, pp. 7–9 を参照。日本での宗教政策についての先駆的研究は、竹中浩「近代ロシアにおけるナショナリズムと宗教政策」『ロシア史研究』第64号、1999年、正教と近代との関係についての研究史概観としては、Paul W. Werth, “Lived Orthodoxy and Confessional Diversity: The Last Decade on Religion in Modern Russia,” *Kritika: Explorations in Russian and Eurasian History* 12, no. 4 (2011), pp. 849–865 を参照した。

17 *Чистович*. История; *Чистович*. Руководящие деятели.

18 *Р-ов* [*Ростиславов*] . Феофилакт Русанов.

19 *Попов*. Игнатий-Аврелий Феслер; Barton. *Ignatius Aurelius Feßler*.

20 *Феофилакт* (Русанов). Замечания члена Коммисии духовных училищ, преосвященного Феофилакта, архиепископа Рязанского, на конспект философских наук, преставленный г. Феслером // Чтения в Императорском обществе истории и древностей Российских при Московском университете. 1859. кн. 2. V. Смесь. С. 115–123.

神学校改革を主導した有力官僚とその側近の知識人ネットワークがあったことを指摘し、第3節ではフェスラー追放を主導した正教会有力聖職者のフェスラーに対する不満の背景を説明する。第4節ではロシアに赴任する以前のフェスラーの思想形成を概観し、彼がオーストリア、プロイセンでの政治・思想動向と密接に関わっていたことを指摘し、第5節ではフェスラーの授業概要が外形的にはヴォルフ派の枠組みに基づきながらも実質的には当時まだ未公認のカント主義やプラトン主義の要素を組み込んでいたことを明らかにする。第6節では有力聖職者によるフェスラー批判における反プラトン主義を指摘し、第7節ではフェスラーを批判した有力聖職者が失脚する中で追放されたフェスラーが中央政界との結びつきを維持していたことを指摘し、神学大学学則でプラトンが重視された背景には、フェスラー自身の影響だけでなく、フェスラーを追放した有力聖職者に対立していた世俗官僚や別の高位聖職者グループの意向も作用していたことを明らかにする。最後にフェスラーのプラトン主義は、当時の公認哲学だったヴォルフ派哲学に欠如していた超越論的次元を神学大学教育に導入することによって神学大学の哲学的知性の質的転換を促したと結論づける。

## 1. ペテルブルク神学大学の設立の経緯

アレクサンドル1世は、父パーヴェル帝の聖職者優遇政策に反発し、有名無実化していたピョートル大帝の宗務規則<sup>レグラメント</sup>の実質化と祖母エカテリーナの啓蒙精神への回帰をめざしていた。彼は1803年に親友アレクサンドル・ゴリーツィン公を宗務院総監<sup>プロクロー</sup>に任命するとともに、1808年に国政改革のためにミハイル・スペランスキイを皇帝秘書官長に抜擢する。また同年、神学校改革の推進機関として皇帝直属の神学校委員会を設置し、議長にはスペランスキイを、委員にはゴリーツィンに加え、行政手腕に優れた改革派として宗務院理事・カルーガ大主教フェオフィラクト（フョードル・ルサノフ）を議長の補佐役として任命する<sup>(21)</sup>。同時に正教会高位聖職者の代表として任命されたのが宗務院筆頭理事・ペテルブルク府主教ムヴロシイ（アンドレイ・ポドベドフ）である<sup>(22)</sup>。こうして皇帝主導で世俗官僚ゴリーツィン、スペランスキイと改革派聖職者フェオフィラクトのラインで正教会トップを巻き込むかたちで神学校改革が推進される。スペランスキイとフェオフィラクトが分担起草した学則暫定案は1809年に施行され、最初に首都の高等神学校がペテルブルク神学大学へと改組された<sup>(23)</sup>。学生選抜の方針は、従来の教育課程で「神学」の未履修生でも「哲学」を履修済みであれば入学可とし、既存の神学教養は重視されなかった。第1期生100名のうち首都の高等神学校出身者は7名にすぎず、残りは各地の神学校から選抜された。哲学・古典語の教員人事を担

21 Чистович. История. С. 182.

22 П. М. Из прошлого // Русский вестник. Т. 74. 1868. С. 489. 前任の宗務院総監からムヴロシイの汚職に関する報告を受けていた皇帝は、この件をムヴロシイに仄めかすことで改革への抵抗を牽制したという。ここで参照した匿名 П. М. の資料はアレクサンドル1世時代の宗務院を巡る人事抗争の詳細な情報を含んでいる。Р-ов. Феофилакт Русанов. С. 238–239.

23 Проект. С. 910. 神学大学は、中等神学校（セミナリア）修了者のための高等教育機関、宗教検閲・入学試験・学位認定を管轄する学術審議会、学区内の神学校を指導する教育行政機関を兼ねることになる。О усовершеннии Духовных училищ // ПСЗ. Т. XXX. С. 389–392.

当したスペランスキイは、ヘブライ語教授としてドイツからフェスラーを招聘し、ゴリーツィンは科学アカデミー会員に数学教授を担当させるとともに独・仏語教授にはネイティヴを採用した。フェオフィラクトは自ら文学教授職を引き受け、アムヴロシイは暫定学長兼神学教授として掌院エヴグラフ（エヴフィミイ・ムザレフスキイープラトノフ）を指名した<sup>(24)</sup>。哲学・数学・言語の教授は世俗委員が世俗学者を選考採用し、神学・文学・歴史学の教授は聖職者委員が聖職者を選考採用した。こうした人事方針には、経験に立脚した事実的認識（歴史学・文法・修辞学・詩学）よりも、合理的論拠に立脚する哲学・数学を上位に位置づけたクリスティアン・ヴォルフの学問観が反映されていた<sup>(25)</sup>。

助教授人事については国内の神学校から優秀な教員を選抜することを聖職者委員が提案し、その人選はフェオフィラクトに一任された。その結果、モスクワから修道司祭のエヴゲーニイ（カザンツォフ）と、後に学長になるフィラレート（ドロズドフ）、カルーガから修道司祭レオニード（ザレツキイ）が選任された<sup>(26)</sup>。採用された教授・助教授には授業概要を提出させ、委員会がそれを点検したうえで改めて担当科目と職位を決定することになり、その結果、エヴゲーニイは哲学助教授に、レオニードは文学助教授に、フィラレートは格下の神学大学附属神学校の哲学講師に配属された。当初、フィラレートは文学担当を、レオニードは哲学担当を希望していたが、フェオフィラクトがフィラレートを嫌って自分の主教区出身者であるレオニードを自分の文学講座に置きたかったと考えられる<sup>(27)</sup>。

暫定学則案では、従来の知識伝達型（口述筆記式）の授業を改め、学生の自律的な読解力を育成する方法を重視し、最新の学界動向を反映した教科書を指定するよう要求し、「優れた教育方法とは、学生達の内にある理性の本来の力と活動を開花させることにある。それゆえ、学生達の知性を喚起することなく、教授達が自分の知性を無駄に披瀝するだけの冗長な説明は、優れた方法に反する。[...] 学生達自身で文献を読解させることが優れた方法の本質的に重要な規準の一つである<sup>(28)</sup>」とした。哲学授業に関しては「学生達に哲学の真の精神を理解させ、彼ら自身が哲学研究にとりくむことを習得させ、彼らにそのような最良の探究方法に習熟させること」を奨励し、神学生の自主的で自律的な哲学研究の能力の育成を最重視するとともに、「哲学教授は、学生に哲学用語法を記憶・再確認させるような授業は

24 Чистович. История. С. 181–183; Чистович. Руководящие деятели. С. 45–47.

25 ヴォルフについては、山本道雄「クリスティアン・ヴォルフの論理学思想について：『ラテン語論理学』の概念論、判断論、真理論を中心に（2）付録：翻訳資料 クリスティアン・ヴォルフ『哲学一般についての予備的考察』（山本道雄・松家次朗訳）』『文化學年報』[神戸大学]第15号、1996年、17頁以下；山本道雄『カントとその時代：ドイツ啓蒙思想の一潮流』晃洋書房、2008年を参照。

26 П. М. Из прошлого. С. 489. その他にペテルブルク的高等神学校から3名、モスクワ聖三位一体神学校から2名、ヤロスラヴリ神学校、ハリコフ・コレギウムから各1名が助教授として採用された。Чистович. История. С. 183–184.

27 Чистович. История. С. 184; Чистович. Руководящие деятели. С. 46. フィラレートの後見人のモスクワ府主教プラトン（レヴシン）と当時カルーガ主教だったフェオフィラクトとの間には教区再編問題をめぐって遺恨があったとされる。Р-ов. Феофилакт Русанов. С. 236–237.

28 Чистович. История. С. 188. 以下では引用文中の〔 〕による補足は引用者による。1809年暫定学則と1814年学則最終版とは表現に異同があるが、引用部分の趣旨は同じである。Проект. С. 923を参照。

簡潔に済ませて、その後、彼らを哲学学説の原典自体へと直ぐに導き、それらの原典を用いて諸々の哲学的見解の根本原理とともに、様々な理論の相互関係をも説明すべきである<sup>(29)</sup>』という原典主義の立場を採った。このような哲学教育観も、「哲学する自由」を掲げて、他人の意見への隷従ではなく、自分自身で真理を論証することを重視したヴォルフの哲学観<sup>(30)</sup>を反映しており、また教授達が哲学の「導きの糸」として「福音の真理」や「キリスト教の教え」を堅持するよう命じた点<sup>(31)</sup>でも啓示真理と哲学真理とは矛盾しないとしたヴォルフの立場<sup>(32)</sup>に沿っており、全体としてヴォルフ哲学が改革の規準とされていた。

## 2. フェスラー招聘の経緯：愛弟子のルシン人ネットワーク

フェスラーの招聘をスペランスキイに進言したのはペテルブルク高等師範学校の哲学教授ピョートル・ローディ(1764－1829)だった。神学校委員会は、ローディが提出したフェスラー著のオリエント語教科書とヘブライ語撰文集を吟味し、彼のヘブライ語教授招聘を内定した。だがフェスラーが要求した追加の招聘条件を委員会が拒否したため彼の人事案は一旦頓挫する。しかし、スペランスキイが改めてフェスラーの追加条件を受諾する旨の書簡を送ったので、彼は招聘に応じることになった<sup>(33)</sup>。スペランスキイは、教授職の所定年俸1500ルーブリに1000ルーブリを加算して年俸2500ルーブリを約束した<sup>(34)</sup>。おそらくスペランスキイはフェスラーにヘブライ語だけでなく着任後に哲学教授も兼任させることを念頭において年俸加算を約束したのかも知れない。だが、ローディが委員会に提出したのは語学教科書だけで、宗務院の記録でもフェスラーはヘブライ語教授として招聘することになっていた<sup>(35)</sup>。それゆえスペランスキイが委員会・宗務院の承認なしにフェスラーの哲学教授兼任を予定して年俸加算を内約していた可能性が高い。いずれにしてもスペランスキイがフェスラー招聘を是が非でも実現させようとしたことは間違いない。

スペランスキイにフェスラーを推薦したローディは、ハプスブルグ領ザカルパチアのムンカチ(現ウクライナ領ムカチェヴェ)出身のルシン人で、ハプスブルグ領ガリツィアのレンベルク(現ウクライナ領リヴィウ)の大学を卒業後、母校の哲学教授、ポーランド領のクラクフ大学教授をへて、1803年からペテルブルク高等師範学校に赴任し、カントなどのドイツ哲学に精通した哲学教授として知られていた<sup>(36)</sup>。フェスラーの回想によれば、レンベルク大学教授時代の「私の優秀な学生」ローディがロシアの神学大学の「オリエント語と哲学

29 Чистович. История. С. 192.

30 山本「クリスティアン・ヴォルフ」131頁以下を参照。

31 Чистович. История. С. 192–193.

32 山本「クリスティアン・ヴォルフ」147頁。

33 Чистович. История. С. 249, 256; П. М. Из прошлого. С. 505.

34 助教授の年俸は700ルーブリ。数学教授の年俸3000ルーブリと並んでフェスラーの年俸2500ルーブリは破格で、学長兼神学教授の年俸2000ルーブリを上回っていた。Попов. Игнатий-Аврелий Феслер. С. 631; Чистович. История. С. 183, 265–266.

35 宗務院文書では哲学教授にはローディが内定されていた。Круглов. Философия Канта. С. 350.

36 Круглов. Философия Канта. С. 260–267.



の教授」に推薦してくれたが、<sup>37</sup> 宿舍などの招聘条件が不明だったので躊躇していたところ、より良い条件が再提示され、ロシア在住の「信頼できる友人達による保証」もあって、親族や友人・有力者達の慰留をふりきって、この招きを妊娠中の妻<sup>37)</sup>とともに「神の召命」として受け入れたという<sup>38)</sup>。

1809年6月2日付の正式な招聘状を得た<sup>39)</sup> フェスラーは気候の良い8月に出発すべく準備したが、彼が神経の病に罹ったため出発は延期となる。回復した彼が3人の子と身重の妻と一緒に住処のあったベルリン近郊の町ブッコーを無天蓋の馬車で出発したのは既に初冬の12月8日であった。だがその年の沿バルトの気候は格別に温暖だったため旅路はさほど厳しく感じられなかった。さらにロシア帝国に併合された直後の旧クールラント公国の旧都ミタウ（現ラトヴィアのイェルガヴァ）やリフリャント県都リガ（現リトアニア）では現地ルター派の牧師や信徒から歓待され、彼にとっての「ロシア帝国」の第一印象は「非常に居心地のよい」ものだったという。翌年1月13日に一行が首都ペテルブルクに到着した時にはローディが出迎え、さらに同じレンベルク時代の教え子イヴァン・オルライ、ヴァシリイ・クーコリニク、同郷人ミハイル・バルギヤンスキイらザカルパチア出身の知識人が一家を歓迎して参集した<sup>40)</sup>。このことはフェスラー招聘の背後にザカルパチア出身のルシン人知識人のネットワークの働きかけがあったことを示唆していた。さらにフェスラーはローディを通じてドイツ系の政府高官とともに、皇帝侍従・外国信条宗務局長官アレクサンドル・ツルゲーネフ、セルゲイ・ウヴァーロフ（後の国民教育大臣）、トランシルバニア出身の外交官Ф.М.フォン・ホーエンシルドなどの「気持ちの良い」知己を得た。また彼は、スペランスキイの執務室を拠点とするフリーメイソン会所「北極星」を設立し、ローディらルシン人学者達と

37 医者は妊婦がロシアの厳冬を乗りきることは無理だと忠告した。Barton, *Ignatius Aurelius Fessler*, p. 446.

38 Fessler, *Rückblicke*, pp. 221–222; Barton, *Ignatius Aurelius Fessler*, p. 446.

39 Barton, *Ignatius Aurelius Fessler*, p. 447.

40 日付は露暦で示す。Fessler, *Dr. Fessler's Rückblicke*, p. 222; Barton, *Ignatius Aurelius Fessler*, pp. 448, 453. オルライ (1770–1829) はザカルパチアのフスト（一説ではパラジ）出身で、1788–1789年にレンベルク大学で学んだ後、1791年にペテルブルク医科外科学校に留学し、デルフト大学で医学博士号を取得して宮廷外科医として勤務していた。彼は、在外スラヴ人のパトロンを自任したノヴォシリツェフ公爵の後見で1803年にバルギヤンスキイ、クーコリニク、ローディら同郷のルシン人学者をペテルブルク高等師範学校の教授として招聘することに尽力した。オルライはルシン人学者招聘の際に「カルパチア<sup>カルパト</sup>ロシア人はロシアからハンガリーに移住した<sup>ロシア</sup>ルシン人<sup>ナロード・ルースキイ</sup>である」と主張していた。Лайош, Тарди. Иван Семенович Орлай (1770–1829). С. 136–137. [[http://www.orvostortenet.hu/tankonyvek/tk\\_05/pdf/5.1.5/1959\\_013\\_tardy\\_lajos\\_orlay\\_jnos.pdf](http://www.orvostortenet.hu/tankonyvek/tk_05/pdf/5.1.5/1959_013_tardy_lajos_orlay_jnos.pdf)] (2013年9月25日閲覧). クーコリニク (1765–1821) は、ムカンチ出身のルシン人で、レンベルク大学を卒業後、ポーランドのザモシチ王立学習院教授だったが、オルライの推薦で1803年にペテルブルク高等師範学校教授に招聘された。レンベルクでのフェスラーとオルライ、ローディ、クーコリニクとの出会いは、Fessler, *Dr. Fessler's Rückblicke*, p. 130. を参照。バルギヤンスキイ (1769–1847) は、スロバキアのストロプコフ近郊の村出身のルシン人で、ウィーン大学で学び、パシュト大学教授だったが、1803年にペテルブルク高等師範学校に招聘され経済学を講じ、法典編纂委員会で活躍した。彼らの重要性については、タチャーナ・ジュコフスカヤ（橋本伸也訳）「19世紀前半ペテルブルク大学の教授・学生中の民族集団」橋本編『ロシア帝国の民族知識人』27頁を参照。

ともにホーエンシルド、法典編纂委員 Г.А. ローゼンカムプフ、外務省官僚 М.Л. マグニツキイ（後のカザン学区視学官）らが入会した<sup>(41)</sup>。こうして彼は首都の学者・高官グループの間に次々と人脈を築いていった。

### 3. フェオフィラクトのフェスラーへの不満と追放劇：連鎖する遺恨

1810年1月にペテルブルク神学大学が開学すると、当初、哲学授業は助教授エヴゲーニイが担当していた。しかし、フェスラーの哲学の学識も高いという理由で彼は哲学教授も兼任することになった<sup>(42)</sup>。このことが、神学校委員会委員と文学教授を兼務していた大主教フェオフィラクトの不満を呼び起こすことになるのであるが、彼が、何故に招聘教授を批判するに至ったのかを理解するためには、この高位聖職者の経歴と人間関係を知る必要がある。

フェオフィラクトは、ペテルブルク高等神学校でのスペランスキイの先輩で、かつて皇帝パーヴェルの好意を得て33歳の若さで宗務院理事に抜擢され、仏語が堪能で仏文学に精通していたため世俗社交界でも人気者だったが、ある政争に巻き込まれて失脚した過去もっていた。当時、有名無実化していた宗務規則を再び実質化させようとした宗務院総監ヴァシーリイ・ホヴァンスキイやペテルブルク府主教ガヴリイル（ピョートル・ペトローフ・シャポシュニコフ）と、彼らに抵抗した宗務院理事アムヴロシイ（ポドベドフ）との抗争が激化していた。結局、皇帝パーヴェルは、総監と府主教を解任し、新しい府主教にアムヴロシイを任命することで決着させた。その際、ガヴリイルの側近だったフェオフィラクトも巻き添えとなり、宗務院理事を罷免され、カルーガ主教に昇格という形で実質的に左遷されたのである。ところが、パーヴェル没後、アレクサンドル1世がゴリーツィンを新総監に任命すると、ゴリーツィンは自らの左遷時代に意気投合したフェオフィラクトを再び宗務院理事に抜擢したのである<sup>(43)</sup>。こうして中央聖職界に復帰したフェオフィラクトは、ゴリーツィンやスペランスキイと共に改革派勢力の一翼を担うようになり、また政治問題にも言及する大胆な説教によって社交界で再び人気を博し、国家評議会議員にも任命された。修道的厳格主義を好まず、派手な服装をまとい、時折、日傘を差して散歩していた彼は、仏語での会話を好んだことから、聖職者の政敵から「フランス人高僧」、「世俗教養人」と綽名されたという<sup>(44)</sup>。つまり、彼は、世俗政治家達から見れば、世俗教養にも精通した正教会内の改革派として高く評価されていたが、正教会内の守旧派から見れば世俗の権力と外国文化の追随者と映っていたのである。

このような立ち位置にあったフェオフィラクトが、フェスラー追放へと動き出す背景には次のような複数の状況が重なっていた。第1に、フェオフィラクトは当時主流のヴォルフ派や最新のカントを含め「ロシア随一の哲学通」だと自負していた。ところが、フェスラーと接して

41 Fessler, *Dr. Fessler's Rückblicke*, p. 222; Горбачев. И.А. Фесслер. С. 222–223; Лайош. Иван Семенович Орлай. С. 142; [Магницкий М.] Два доноса в 1831 года // Русская старина. 1899. № 2. С. 291–292.

42 Чистович. История. С. 193, 250; Чистович. Руководящие деятели. С. 47.

43 П. М. Из прошлого. С. 460–462, 481; Р-ов. Феофилакт Русанов. С. 235–236.

44 П. М. Из прошлого. С. 491–492; Р-ов. Феофилакт Русанов. С. 231–233, 239.

哲学知識の面で彼に敵わないと知り、自尊心を酷く傷つけられた、と指摘されている<sup>(45)</sup>。第2に、フェスラーのせいでフェオフィラクトが選任した文学助教授の学識不足ぶりが学生達を前に暴露されてしまったという事情である。文学講座では助教授レオニードが美学を講義していた。彼が使った教科書は、元カント主義者で後に反カント派に転じたゲッティンゲン大学文学教授フリードリヒ・ブーチェヴェクの『美学』露語訳（1806年刊）だった<sup>(46)</sup>。ところが助教授は、ブーチェヴェクが論じたカントの概念を上手く説明できず、学生達は授業中に居眠りを始める始末だった。そこで彼は上司の教授フェオフィラクトに自分の講義を学生達が理解してくれないと相談したところ、教授は助教授によるカントの解説に間違いがないと保証した。とはいえ相変わらず助教授の説明に納得できなかった学生達は、ヘブライ語教授のフェスラーにブーチェヴェクについて質問するようになる。そこでフェスラーが、当時としては新機軸だったカント独特の用語法を説明すると、学生達はブーチェヴェクの内容も容易に理解できるようになったという。このことが縁で学生達はフェスラーの宿舍<sup>(47)</sup>に頻繁に出入りするようになり、彼のヘブライ語の授業でも構わず美学や哲学について質問するようになった<sup>(48)</sup>。こうしてフェスラーは、語学の教師にもかかわらず文学に関する学生達の質問に答えたことで、文学助教授の「まるで指導教員のような」立場になってしまい、文学教授フェオフィラクトは「自分の権限を侵害された」と憤慨するに至ったとされている<sup>(49)</sup>。第3に、フェスラーが哲学教授に推挙された背景に大主教フェオフィラクトと府主教アムヴロシイの高位聖職者同士の確執も横たわっていた。学生達の間でのフェスラーの評判を知ったアムヴロシイは、自称哲学通のフェオフィラクトへの当て付けとしてフェスラーに哲学も担当させようと神学校委員会にて提案した。スペランスキイはもとより、ゴリーツィン総監もこれに同意したため、フェオフィラクトは承認せざるを得なかった。だが、フェオフィラクトの側に遺恨が残ったのは間違いない<sup>(50)</sup>。

従来指摘されてきたこれらの事情に加えて、フェスラーがフェオフィラクトの逆鱗に触れた決定的な原因は、彼がフェオフィラクト起草の教育課程の改訂に関与したことだった。その経緯は次のようなものであった。まずフェスラーの博識に感銘したゴリーツィン総監は、彼に神学大学での教育内容についても助言するように委託した。このことは、フェオフィラ

45 П. М. Из прошлого. С. 506; P-ов. Феофилакт Русанов. С. 242.

46 原典は、F. Bouterweck, *Aesthetik* (Leipzig, 1806). 当初、フィラレートはレオニードの美学講義を高く評価していた。Гаврюшин Н.К. Мистический неозеллизм и идеал «эстетической Церкви»: Ф. Бутервек и Ф. Гельдерлин // Вопросы философии. 2005. № 3. С. 145–146. だが後にレオニードがカント哲学を上手に説明できないので学生達の不評をかったと回想している。Круглов. Философия Канта. С. 353.

47 アムヴロシイはフェスラーに好意を示し、彼に神学大学に隣接した広い間取りの宿舍を提供していた。Fessler, *Dr. Fessler's Rückblicke*, p. 223; Barton, *Ignatius Aurelius Feßler*, p. 453.

48 П. М. Из прошлого. С. 506; P-ов. Феофилакт Русанов. С. 242.

49 П. М. Из прошлого. С. 507. 最新の知識を渴望していた神学生達は旧神学校出身の助教授達に満足できず最新哲学に精通していたフェスラーに絶大な信頼を置いていたという。P-ов. Феофилакт Русанов. С. 241.

50 П. М. Из прошлого. С. 507; P-ов. Феофилакт Русанов. С. 242; Круглов. Философия Канта. С. 353.

クトが共同起草した暫定学則を部外者（しかも外国人）が「点検」することを意味した。総監からの委託を受けてフェスラーは次のように提言した。

私達の神学大学の学生達は教室で長時間、聴講しなければならないが、その授業時間は長すぎるのであり、少なくとも〔大多数の〕平凡な才能の者達が修学上の望ましい成果をあげるためには不適切である。〔…〕私の考えでは、大学や神学大学の本来の設置目的は、そこに在籍する若者達を、専ら聴講を通じて難解な頭の体操に習熟させることによって学者として卒業させることではない。むしろ、授業の唯一の目的とは、学生達にまさに確実な研究と学識を得るための方法を身につけさせ、彼らにこの授業から自分自身の思索のための素材を汲み取らせることにある。この真の学究方法のために学生達には〔聴講以外の〕十分な〔余暇〕時間が確保されるべきである。<sup>(51)</sup>

つまり、学生達が聴講だけに多くの時間を費やすことは、その分だけ自分自身による「思考と考察に費やすべき時間」が削られることになり、卒業後に必ずしも学者になるわけではない大多数の学生達の教育にとって望ましくないというのである。そこで彼は、授業時間を現行の1日8時間から6時間に短縮し、さらに必修科目を神学と哲学に限定し、その他の歴史学、数学、文学を補助科目に格下げするよう提案した<sup>(52)</sup>。この案は、総監を通じて神学校委員会に提議されたが、文学教授であり多様な教科を必修化した最初の教育課程を起草した本人であるフェオフィラクトは頑なにこの修正案に抵抗した<sup>(53)</sup>。こうして一教育者としてのフェスラーの率直な提言が、高位聖職者同士の積年の因縁を背景にして<sup>(54)</sup>、文学教養と哲学通を自負した大主教・学則起草者フェオフィラクトの不満を爆発させる火花となった。

これとは対照的に学生達の間でフェスラーの人気はますます高まっていた。1810年2月1日に始まった彼の哲学授業を第1期生ほぼ全員の96名が聴講した。彼は、ラテン語での授業内容を理解できなかった学生達のために朝8時から夕方5時まで大学内の研究室で補習指導をおこなった。そのため彼は学生達の「高い信頼と温かい愛着」を獲得したという。彼らの中でフェスラーが優秀な学生として名前を挙げているのは、パヴスキイ、ヴェトリンスキイ、コンスタンティン・プラトノフで、この3人はいずれも優秀な成績で修了して母校の教

51 Чистович. Руководящие деятели. С. 48.

52 Чистович. Руководящие деятели. С. 48–49.

53 Р-ов. Феофилакт Русанов. С. 240. 結局、この修正案は、フェスラー追放後の委員会で「文学」も必修科目に含めるという再修正を経て採用された。Чистович. Руководящие деятели. С. 49.

54 フェオフィラクトとアムヴロシイとの積年の確執を一層激化させたのは学生食堂での「ピロシキ一揆」事件だった。フェオフィラクトは自分の主教区カルーガから呼び寄せた掌院イオンに、神学大学の学生監督係と経理係とを強引に兼務させていたが、イオンは学識不足のせいで学生監督係として学生から不評だっただけでなく、学生食堂を管轄する経理係としてもその不手際によりピロシキの不味さに端を発した学生騒動を引き起こした。しかし上司のフェオフィラクトは、この件を学生当事者から事情聴取せずに一方的に「一揆」だと断定して報告した。そのため、騒ぎに関与した学生の半数が兵役に送られ残り半数が下級教会勤務者として追放されるという過酷な処分が下されたが、その多くが府主教アムヴロシイを支持する学生派閥に属していたのである。Р-ов. Феофилакт Русанов. С. 243–245.

員に任命された<sup>(55)</sup>。その一人パヴスキイは「私達への教育は酷かった。良い教授もいたが、それは（〔後の〕モスクワ府主教の）フィラレートとフェスラーだけだった<sup>(56)</sup>」と回想している。また別の卒業生は複数の当事者からの伝聞を次のように紹介している。

学生達は心底、ドイツ人教授〔フェスラー〕を愛していたが、彼〔フェスラー〕は、彼ら神学生達に次のように語ったものだった。私〔フェスラー〕がペテルブルグに赴くことになった時、自分が教えなければならないのは野蛮人の一種だろうと思っていた。しかし、今や、神学大学の学生達ほど知的で好奇心が旺盛な若者は、ドイツでも滅多にお目にかかれないということがはつきりと分かった。これ以上の何を望むべきか？まさに瓢箪から駒だった。<sup>(57)</sup>

こうして哲学授業を始めたフェスラーは、自分の<sup>コンспект</sup>授業概要を授業開始から遅れて4月23日にアムヴロシイを通じて神学校委員会に提出する。ところが、審査の結果、フェスラーによる哲学の説明は「善からぬもの」であるから、「ヴォルフ派の方法と用語法」にもとづく新しい授業概要を再提出させることに決まった。その際、フェオフィラクトとスペランスキイの双方が、この件に関する自分の見解をそれぞれ別途、文書で提出することを主張し、議事録への署名を保留した。委員会での議論は概ね次のようなものだった。フェオフィラクトは、フェスラーの用語法は一見すると通常の（つまりヴォルフ派の）用法ではあるが、それを「変造されたプラトン主義思想」と結びつけ、異様な形で定義しているのを、改めてヴォルフ派の用語法で書き直しさせることは無意味であると主張した<sup>(58)</sup>。他方、スペランスキイは、フェスラー自身に神学校委員会での直接弁明の機会を与えるように提案した。これに対してフェオフィラクトは、もしそのような弁明を認めることになれば、フェスラーの授業概要を問題視した自分への「侮辱」となるだろうと反対した。つまり、大主教で宗務院理事である自分と格下の神学大学の一教員が「論争」することは「不作法」極まりないというのである。これに対してスペランスキイは、フェスラーの授業概要は教父著作に根拠を持っており、そのような弁明をフェスラーに執筆させるよう求めたが、フェオフィラクトはあくまでフェスラーを神学大学から追放することに固執し、罷免とまではいわないが依願退職であれば了承すると主張した<sup>(59)</sup>。

---

55 Fessler, *Dr. Fessler's Rückblicke*, pp. 222–223; Barton, *Ignatius Aurelius Feßler*, pp. 453–454. 第1期生首席卒業生のパヴスキイは母校のヘブライ語教授を勤め、後に皇太子の教育係になる。第7位卒業生ヴェトリンスキイは哲学教授に採用され、第6位卒業生コンスタンティン・ボゴスロフスキイ-プラトノフはモスクワ神学大学学長となる。彼ら以外にフェスラーが久しく親交を暖めた教え子イエゴル・レベヂェフの卒業成績は第44位、イリヤ・レヴィコフは第56位で、彼の師弟関係の親密さは必ずしも成績に左右されなかった。Выпускники Санкт-Петербургской (с 1914-Петроградской) духовной академии 1814–1894, 1896–1918 гг. [<http://www.petergen.com/bovkalov/dukov/spbda.html>](2013年8月21日閲覧)。

56 Круглов. Философия Канта. С. 351.

57 Р-ов. Феофилакт Русанов. С. 242.

58 Чистович. История. С. 198; Чистович. Руководящие деятели. С. 50.

59 Чистович. История. С. 198; П. М. Из прошлого. С. 508; Р-ов. Феофилакт Русанов. С. 243.

フェスラーの授業概要が却下されて以降、スペランスキイは神学校委員会の会議を一切欠席する。暫くして7月9日の会議で、スペランスキイは欠席のままゴリーツィンを通じてフェスラーを弁護する論評を提出し、フェオフィラクトもフェスラーを非難する論評を提出した。最終的には、先にフェスラーの哲学教授兼任を提案したアムヴロシイが彼を解職させることに同意して一件落着となった<sup>(60)</sup>。

この解任劇の裏側では、スペランスキイがフェオフィラクトの強硬姿勢を見て、フェスラー擁護を断念し、フェスラーに辞表提出を要請し、その代わりに彼を法典編纂委員会・通信委員に任命することを約束していた<sup>(61)</sup>。他方、フェスラーは、この一件について、教授の仕事が忙しく自分の執筆活動が滞っていたので自ら教授職の辞任を依頼し、その代わり教授職と同額の年俸で、国内の自由往来権をもつ法典編纂委員会・通信委員を拜命することになり、6月末になって念願の退職が認められたと回想している<sup>(62)</sup>。

#### 4. フェスラーの思想形成：ストア派からカント経由でプラトン主義へ

フェスラーは神学大学での哲学授業でヴォルフ派教科書を用いるよう指示されていた。彼自身は「自分の授業で、プラトン主義、アリストテレスのスコラ学、ヴォルフ派の折衷体系、カントの批判主義を重視した」と回想している<sup>(63)</sup>。いったいフェスラーの授業内容はどのようなものだったのか。そこで彼の授業概要を読解するための前提として、以下ではロシアに赴任する以前の彼の思想形成を概観する。

イグナティウス・フェスラーは、1756年にオーストリアとの国境に近いハンガリーの町ザラントファロア（現オーストリア領ズルンドルフ）にドイツ人退役軍人と工場主の娘の一人息子として生まれた。母は敬虔なカトリック信徒でイエズス会創始者に因んで息子の名をつけた。彼女は息子に、行動に結びつかない知識は無意味だと教えており、幼い息子も教父伝や聖者伝を読んで殉教者の生き方を理想化していたという。また母は狭い宗派主義に囚われず知人が帰依していたルター派教会に幼子と一緒に参列していた。イグナティウスは12歳でイエズス会の学校に入学し、俗世からの解脱と敬虔な生活による神との交わりを説いたトマス・ア・ケンピスや神学者ロベルト・ベルラミーノに熱中する<sup>(64)</sup>。教皇がイエズス会を解散させた1773年に彼は、厳格なカプチン修道会に入会し、そこで理性哲学を倫理的な生活と結合した古代ローマの後期ストア派のセネカの著作を熟読する中で「内面世界の最初の覚醒」を体験したという。フェスラーは、セネカの時代にはキリスト教はまだ知られていな

60 Чистович. Руководящие деятели. С. 50, 53. ゴリーツィンがフェスラーの授業概要（ラテン語）をフィラレートによるロシア語訳で読んでいた。П. М. Из прошлого. С. 508–509. フェスラーの後任はゴリーツィンがデルプト大学から招聘したホルンで、彼はヴォルフ派教科書に沿って講義したという。Чистович. История. С. 183, 198, 200, 250, 256.

61 П. М. Из прошлого. С. 508; Чистович. История. С. 198.

62 Barton, *Ignatius Aurelius Feßler*, p. 454; Fessler, *Dr. Fessler's Rückblicke*, p. 224.

63 Fessler, *Dr. Fessler's Rückblicke*, pp. 223–224; Barton, *Ignatius Aurelius Feßler*, pp. 453–454; Круглов. Философия Канта. С. 352.

64 Попов. Игнатий-Аврелий Феслер. С. 588–590.

かったためセネカはキリスト教徒になれなかったが彼は「永遠に聖人」であるように思われたと述べており、ストア派の思想は彼に決定的な影響を与えた。この「イエス以前のキリスト教」という思想は、プラトン主義的な教父著作に触発された可能性もある<sup>(65)</sup>。さらに修道院で彼は新プラトン主義的なディオニシオス・アレオパギテスなどの教父著作を精読するかたわら、世俗の友人から借りた非カトリック的な著作の読書を通して次第に修道制への不信を強めていく。例えば、宗派対立を超えた教会史を著したフランスの歴史家クロード・フローリヤ、厳密な史料批判と実証的歴史叙述により近代歴史学の祖とされるイタリアの文献学者ロドヴィーコ・ムラトーリが説いた教会再建の必要性や修道制の現状の「腐敗」ぶりに得心したという<sup>(66)</sup>。さらに、「神的理性」の立場から教会教義と封建秩序を批判したドイツの宗教哲学者ヨハン・エデルマンや、キリスト教の本質を道徳感情への忠誠とみなして「永遠不変の宗教」を唱えたイギリスの理神論者マシュー・ティンダルを読むにつれて、彼は目の前の教会・修道院への批判意識をさらに強めていく<sup>(67)</sup>。

当時、ハプスブルク君主国ではヨーゼフ2世が、教会・修道院領の「世俗化」を推進していた。フェスラーは、内心では皇帝の改革に共感して教会改革派の皇帝側近と知り合いになる一方で、聖職位階を順調にのぼり23歳で司祭に叙任された。彼はルソーやエルベシウスを批判しつつも、自分自身を「自然と真理の学徒」つまり理神論者だとみなしており、彼の内面世界と外面的地位の矛盾は絶頂に達していた<sup>(68)</sup>。そのさなか26歳の彼は決定的な体験をする。修道院で唯一ハンガリー語を解した彼は、上司からハンガリー人老修道士の臨終の懺悔を聴聞するよう命じられる。その時、彼は、この老人が些細な罪で秘密地下牢に52年間も幽閉されていたことを知ったのである。皇帝ヨーゼフは既に修道院監獄の廃止を命じていたが、多くの修道院がこの命令を無視していた。フェスラーはこの問題を独断で皇帝に直訴する。その結果、領内の全修道院への査察がなされ、修道院監獄が全面的に解体されることになった。さらにフェスラーは皇帝ヨーゼフを支持する冊子を出版し、皇帝権神授説、教会の世俗支配者への服従を唱え、さらに東西教会分裂を招いたローマ教皇達の「分裂主義」を批判した。その結果、彼は、修道院当局から4週間の謹慎処分を受けたが、その代わりに皇帝の特別な庇護を得ることになる<sup>(69)</sup>。そこでフェスラーは世俗勤務への道を模索し、27歳の時にウィーン大学への入学が許可され、自然法・国家法・教会法を専攻し、翌年には皇帝側近の尽力でレンベルク大学に赴任することが決まったのである。しかし、古巣の修道院からレンベルクへ出立する前夜に、「異端よ、死ね！」と叫びながら短刀をもって襲いかかってきた同僚修道士から殺されそうになる。フェスラーは辛くも暗殺未遂を逃れてレンベルクにたどり着くが、ここでも当初、彼は「世俗化した修道士」と中傷されて孤立無援の状態だっ

---

65 Попов. Игнатий-Аврелий Феслер. С. 593. 教父ユスティノスやアレクサンドリアのクレメンスはイエス以前に神的ロゴスが種子のロゴスとして被造世界に先在していたと述べていた。Barton, *Ignatius Aurelius Feßler*, p. 409 を参照。

66 Попов. Игнатий-Аврелий Феслер. С. 594.

67 Горбачев. И.А. Фесслер. С. 218.

68 Попов. Игнатий-Аврелий Феслер. С. 560, 595; Горбачев. И.А. Фесслер. С. 219.

69 Попов. Игнатий-Аврелий Феслер. С. 603, 606; Walker, “‘Renegade’ Monks and Cultural Conflict,” p. 348; Горбачев. И.А. Фесслер. С. 219.

た。しかし、彼は同地のフリーメイソン会所に加入することで社会的孤立から免れることができたという<sup>(70)</sup>。

彼は大学でオリエント語と旧約聖書の研究の重要性を力説し、28歳で神学博士号を取得して正教授に任命され、古代オリエント語の教科書や撰文集を刊行し学界で高い評価を得た<sup>(71)</sup>。この業績は後のロシアからの招聘の決め手となる。彼の古代オリエント語への関心はイエス以前のキリスト教への理神論的信仰とムラトリーの実証的史料批判の精神とが既存の聖書解釈への批判と結合した結果であろう<sup>(72)</sup>。

この時期、フェスラーは、おそらく汎神論論争に触発され、スピノザを読み、その厳密な学問的方法論に圧倒されて一旦は汎神論を受け入れたという。しかし、結局、彼は『エティカ』での「一にして全なるもの」、概念と言葉では表現できない魂の内なる「存在と思惟の統一」が十分に理解できなかった。当時、フェスラーはストア派のマルクス・アウレリウスを「賢明で正しい君主」の理想とし、その人格像を対話形式で描写する著述に着手しており<sup>(73)</sup>、彼の理想の根底には、スピノザの「自然即神」の世界観には欠けていた歴史具体的な道徳的人格像があったのだろう。この理想像は、大学教授に転出して以降、彼の批判対象の重心が教会・修道院から専制君主へと移っていたことと関連していた。当時、ヨーゼフの政策は当初の教会改革から中央集権的紀律国家の強化へと向かっており、1784年の言語勅令で地方行政・大学教育のドイツ語化を推進したため、特にハンガリー人貴族・聖職者の抵抗と民族意識の発揚を呼び起こしていた。フェスラーは、出自こそドイツ人だったが、ハンガリー語を第二母語として育ちハンガリー文化に愛着を抱いており、レンベルク大学の同僚でハンガリー人のイグナツ・マルティノヴィチからの影響もあり<sup>(74)</sup>、かつての「啓蒙君主」ヨーゼフに幻滅し始めていたのである。このような状況を背景にして彼は、イギリスの共和派を主人公にしてジェームス2世と彼を支持した教皇派を批判的に描写した悲劇を書いたところ、その底意はヨーゼフ批判だと告発されることになる。こうして彼はオーストリアの世俗権力からも迫害されることになり、知人のガリツィヤ総督から逮捕の危機が迫っていると警告を受け、知人の出版者を頼ってプロイセン領シュレージエンのプレスラウ（現ポーランド領ウロツワフ）に出奔する<sup>(75)</sup>。

シュレージエンでは逆にフェスラー著の悲劇への好意的な書評を目にした領主ショーナイク＝カロラート侯から子息の家庭教師として招かれ、この侯爵の庇護のもとで彼は著述に専

70 Попов. Игнатий-Аврелий Феслер. С. 606; Горбачев. И.А. Феслер. С. 219–220.

71 Попов. Игнатий-Аврелий Феслер. С. 608.

72 プロテスタント圏で発展した聖書文献学は、旧約のマソラ校訂を巡る論争の結果、聖書テキストの確実性に疑義を生じさせ、プロテスタントの聖書主義の土台を動揺させる手段としてカトリック教会の側でも重視されていた。Suzanne L. Marchand, *German Orientalism in the Age of Empire: Religion, Race, and Scholarship* (Cambridge: Cambridge University Press, 2009), pp. 30–32.

73 Попов. Игнатий-Аврелий Феслер. С. 610.

74 Горбачев. И.А. Феслер. С. 220; Fessler, *Dr. Fessler's Rückblicke*, p. 132. マルティノヴィチ(1755–1795)は元フランシスコ会士でレンベルク大学数学・自然科学教授だったが、後に「ハンガリー・ジャコバン派」の指導者として処刑された。

75 Попов. Игнатий-Аврелий Феслер. С. 612; Горбачев. И.А. Феслер. С. 220.



念する。彼は、人格・権利・所有権の庇護者という理想的な立憲君主としてマルクス・アウレリウスを描いた伝記を出版するとともに<sup>(76)</sup>、ルター派に改宗することを決意する。彼の説明によれば、自分はカトリックを敬っているとはいえ、「福音派、改革派、ヘルンフト派<sup>(77)</sup>、マホメット派、そして地上のあらゆる諸教会」も同じように尊敬しており、「それらの諸信条には多かれ少なかれ〔同一の〕宗教的内容の本質が含まれている」と考えているものの、自分自身としてはどんな「教会」であってもその外にいるのは現世に生きる人間にとって不自然だという立場から、教会中立主義を採らずに敢えてルター派に改宗したという。その際、彼は、異宗派に寛容な牧師の理解を得て、カトリック信条への呪詛もルター派信条による信仰告白もせずに洗礼を授かったという<sup>(78)</sup>。

このシュレージエン時代にフェスラーは、カントに傾倒し、哲学的批判主義、道徳的厳格主義、道徳規範の普遍性、人間の尊厳、自由意志と行為の自己責任といったカントの命題に夢中になる。彼は、カント哲学に自分のストア派的思想を裏づけてくれる論拠を見いだそうとして『純粹理性批判』、『実践理性批判』、「ヘルダー論評」、「宗教論第1論文」（『単なる理性の限界内における宗教』第1部）を熟読し、カントとストア派との類似関係を探究する中でカントに書簡を送って「実践理性」とストア派はどれほど近いのかを尋ねるまでになっていた<sup>(79)</sup>。同時にフェスラーは歴史研究への関心も強め、ハンガリー史や歴史小説の執筆に専念し、文学を「民族の道徳的・美的教養の形成」に寄与するものと高く位置づけるなどロマン主義からの色濃い影響も受けていた。彼は、36歳で初めて妻帯し<sup>(80)</sup>、在俗信徒として生きようと決意するが、40歳の時、侯爵家の財政悪化のため家庭教師を解雇され、ベルリンに移住してそこでロシアのリフリャンド県出身の貴族子弟のための寄宿学校を開く。だが翌年にはパーヴェル1世が海外留学中の臣民を召喚したため学校は閉鎖となってしまう。失意の彼を受け入れてくれたのは再びメyson会所であった。世界市民的な人間関係を第一義としていた会所活動のなかでフェスラーは次第に頭角をあらわし、最終的に最高位のグロスマイスターに昇進する。彼は、国家・教会の外部での人間の純粋な道徳的完成を追求する集団として会所に期待していた。だが、当時の会所では、旧来の三位階（見習・弟子・親方）の上に「最高位階」と呼ばれた複雑な位階制が構築されており、秘術的儀礼への熱中が支配していた。そこでフェスラーは、哲学者フィヒテとともに人類は「一つの家族」として、その「霊的完成」を目指すべきであるという立場から最高位階と秘術的儀礼を廃止し、分裂していた諸会所を原初の素朴な形態で統一するための改革運動に取り組み始める。ところがキリスト教に改宗した元ユダヤ教徒の加入を援助したフェスラーとそれに抵抗した多数派との

76 Горбачев. И.А. Фесслер. С. 221; Попов. Игнатий-Аврелий Фесслер. С. 613.

77 ボヘミア兄弟団の子孫がヘルンフト村で組織した信仰共同体。

78 Попов. Игнатий-Аврелий Фесслер. С. 614, 616–617; Walker, “‘Renegade’ Monks and Cultural Conflict,” p. 348.

79 カントからの返答は現存しない。Горбачев. И.А. Фесслер. С. 221; Круглов. Философия Канта. С. 349–350. カントはストア派の現世主義を批判したが、彼らの道徳重視の面では評価した。Frederick C. Beiser, “Moral Faith and the Highest Good,” in Paul Guyer, ed., *The Cambridge Companion to Kant and Modern Philosophy* (New York: Cambridge University Press, 2006), p. 594; Denis Lara, “Kant’s Conception of Virtue,” *The Cambridge Companion to Kant*, pp. 525–526.

80 Горбачев. И.А. Фесслер. С. 221.

対立のなかで改革運動の限界を感じた彼は 1802 年に会所を脱退し、妻とも協議離婚してドイツ全土の旅にでる<sup>(81)</sup>。各地を巡るなかでカント主義者と交流しつつも彼にとって最も印象的だったのがヘルダーと面会であったという。フェスラーは、ヘルダーがカントの純粋理性性の反対者であることを知っていたが、「この善良で全く宗教的な人」への敬意ゆえに自分のカント主義的信念を弁護することは差し控えたという<sup>(82)</sup>。このヘルダーとの会話はフェスラーのカント的理性信仰を動揺させることになる。彼はカントの『単なる理性の限界内における宗教』での純粋実践理性の重要性を認めていたが、それでもカントの理性信仰に最終的な確信をもてなかったという<sup>(83)</sup>。

ベルリンに戻ってから彼は再婚し、翌 1803 年、ベルリン郊外の小さな領地を購入して隠遁生活を始めるようになる。しかし、1806 年のナポレオン軍の侵入により彼の家計は破綻し、彼は領地を売却して極貧の中で各地を転々とするようになる<sup>(84)</sup>。それゆえ、1809 年にローディがロシアでの教職を斡旋してくれたことは 53 歳の彼にとって願ってもない救いであった。この間にフェスラーはシュライアマハーやシェリングに触発にされて、宗派主義を批判する立場からレッシングが唱えた本来の「キリストの宗教」と歴史的な「キリスト教」とを弁別する議論に賛同し、スピノザとカントの理性信仰とを結合して自己の意志と「神」の意志との合一をめざす「新プラトン主義」の立場を標榜するようになっていたという<sup>(85)</sup>。

## 5. フェスラーの授業概要：学問的認識と哲学的生活との統合

チストーヴィチは、フェスラーの哲学の授業概要を「プロティノスとスピノザを想起させる哲学」として解説している<sup>(86)</sup>。だが、この「プロティノス」と「スピノザ」が何を意味しているのかは明確ではない。そこで以下ではヴォルフとカントを参照軸としてフェスラーの授業概要における「プラトン主義」の含意とプロティノスおよびスピノザとの関連を説明する<sup>(87)</sup>。

結論を先取りしていえば、フェスラーの哲学授業の特徴は、カントの認識論（純粋理性批判）と実践論（純粋実践理性）をプロティノスやスピノザに類似した一元論的存在論によって統合し、全体をヴォルフの形而上学体系の用語法によって表現している点にある。

フェスラーは、カントの批判主義と同様に「理性（ratio）と悟性（intellectus）、理念（idea）」

81 Попов. Игнатий-Аврелий Феслер. С. 622, 624; Walker, “‘Renegade’ Monks and Cultural Conflict,” p. 349; Горбачев. И.А. Фесслер. С. 220–221.

82 Попов. Игнатий-Аврелий Феслер. С. 625.

83 Круглов. Философия Канта. С. 350.

84 Попов. Игнатий-Аврелий Феслер. С. 626–627. フェスラーは 1798 年にプロイセン政府からカトリック関係の法律顧問を任命されていたが、ナポレオン軍の侵攻後の 1807 年にこの職も失った。Горбачев. И.А. Фесслер. С. 221.

85 Walker, “‘Renegade’ Monks and Cultural Conflict,” p. 349.

86 Чистович. История. С. 196.

87 以下で検討するフェスラーの授業概要は、チストーヴィチによる 2 頁分と 1/3 頁分の 2 箇所の引用によるが、チストーヴィチが原典の出所を示していないので彼による抜粋引用は現時点で筆者が利用可能な唯一のテキストである。Чистович. История. С. 193–196.

と概念 (conceptus) とを正確かつ明確に区別する<sup>(88)</sup> という立場を採っていた。彼のいう「理性」とは、叡知界を対象とするカントの純粹実践理性にほぼ相当し、彼のいう「悟性」とは、現象界を対象とするカントの「悟性」にほぼ相当している。但し、カントが悟性認識に先だって前提としたアприオリな直観や諸範疇に相当するものをもフェスラーは理性による「理念」と呼んでいる。『純粹理性批判』でカントは、アприオリな直観である空間・時間やアприオリな悟性形式としての諸範疇と、経験による現象界の諸表象とを総合することによって概念的認識が得られると論じたが、次のようにフェスラーも同様の議論をしている。

私が悟性と呼ぶのは、理性の諸理念の反映と、同じく感覚の諸表象とを意識において概念として把握・包摂・改造する力ないし能力のこと、つまり、〔一方で〕諸理念の反映において形象化されざる未規定で無制約のもの〔時空間・諸範疇〕を特定の形式へと規定・記号化し、〔他方で〕感覚の諸表象における多様で雑多なものを統一し、双方について判断を与える力ないし能力のことである。<sup>(89)</sup>

また、この悟性によって得られる「概念」は、あくまで現象界だけを対象としており、感覚を超越した物自体＝叡知界を把握できないとする点でもフェスラーはカントと同じ立場である。

私の見解では、諸理念から悟性を通じて形成される諸概念は、制約された実在と真理にのみ関わるものである。〔…〕抽象化し推論する悟性にとって世界は感性的なものにすぎない。〔…〕悟性は諸理念の条件付きの象徴的な認識だけしかもたらさないのである。<sup>(90)</sup>

このような悟性による概念の「認識 (cognitio)」<sup>ボズナニエ</sup>に対して、フェスラーは理性による理念の「知識 (scientia)」<sup>ズナニエ</sup>を対置する。その場合、彼のいう理性とは、先ずカントの純粹実践理性を意味しており、「知識」とは、実践理性が要請する格率としての理性信仰の対象、つまり「神」・自由・魂の不死を意味していた。だが、同時にそれらは「知識 (scientia)」という表現を媒介にしてヴォルフ哲学でいうところの存在に関する確実な「学問 (scientia)」という趣旨をも担わされており、結果として、フェスラーの「知識」とは、カントが不可知とした物自体＝叡知界を対象とするものとして位置づけられていた。フェスラーは、カントの実践理性の格率（普遍的道徳法則に対して主観的にのみ妥当する実践的原則）としての理性信仰を敷衍しつつも次のように主張している。

それ〔哲学〕は、神、自由、魂の不死の諸理念を、人間の魂と世界の秩序に見いだされる、ある種の二重性〔カントのアンチノミー〕を説明したり、あるいは矛盾を調和させたりするために用いられる実践悟性の単なる公理と見るのではない。それら諸理念は、観想する理性の明晰な〔存在に関する〕知識であり、それら諸理念から形成される〔悟性による〕諸概念に反映され、人間

88 Чистович. История. С. 194.

89 Чистович. История. С. 194.

90 Чистович. История. С. 194.

の内的生活〔つまり実践〕の本質自体を構成するものである以上、その〔人間の内的生活〕の否定面の審判規準であり、同じく〔人間の内的生活の〕活動の審判規準であるとみなすのである。<sup>(91)</sup>

哲学的に見れば、ヴォルフが、「理性と経験との結婚」という名目でアプリアリな推論と経験的事実とを結合して、自然・人間・世界・神を包摂する壮大な（存在論的かつ認識論的）形而上学体系を（カント的視点から見れば）「独断論的」に構築したのに対して、カントは、ヴォルフにおいて混在していた存在論と認識論を切り分けて、存在（物自体）の領域については不可知としつつ、純粹理性批判によって経験に依拠した、より厳密な認識論を樹立する一方で、純粹実践理性によって信仰の領域を自由な道徳的実践の活動領域として再措定した。この分断された2つの領域を再統合すべくフェスラーは、ヴォルフ派哲学を講ずるという装いのもとで、カントの認識論と実践理性のモチーフを継承しつつ、カントが不可知とした領域についても実践の対象だけでなく、理性による超越的知識（<sup>テオリア</sup>観想的認識）の対象としても再措定したのである。このような彼の志向は、同時代人のフィヒテの知識学やシェリングの自然哲学での存在論的観念論のモチーフと共通していた。

フェスラーの場合は、人間に先天的に内在する超越的な理性の力が、カントの「悟性認識」の限界を突破し、人間の内なる情動をプラトン・スピノザ的に統制しつつ、物自体すなわち「神」の領域に到達するための原動力として位置づけられていた。この点こそフェスラーがプラトン主義のイデア論（2頭立て馬車の譬喩）やスピノザの理性主義<sup>(92)</sup>に惹かれた最大の理由である。フェスラーは、自らの「理性」を次のように定義した。

私は、理性を、全ての事象の本質が諸理念<sup>イデア</sup>に存することを理解する力ないし能力、つねに必ず自己自身を観想することによって、自らに先天的に備わっている神の理念、無限で不可視の全体者の理念を観る力ないし能力として理解している。<sup>(93)</sup>

カントが、「神」のイデアを、生得的なものではなく、根源的に獲得されるべき実践理性の「要請」と位置づけ、自己の外部に措定されたこの「神」のイデアに向かって道徳的実践を通じて接近しようとするのに対し、フェスラーは、「神」の理念を人間に先天的に備わっている理性に内在しているものと見なし、それゆえにこの「神」の理念を観想できるものとして位置づけている。それゆえ彼にとって「神」の理念は、彼岸にではなく此岸に実在するものであった。たしかに、フェスラーの「神」の理念は、ヴォルフのようにアプリアリな推論と経験的事実との結合の結果として論証されるべき理論的次元にではなく、超越的なものである点でカントに共鳴している。だが、この「神」の理念が、カントのアプリアリな純粹悟性の形式と同じように悟性の概念的認識をも統制する機能を担う点で、カントの超越論哲学とは根本的に異なる構えになっている。なぜなら、フェスラーによれば「〔理性は〕この本源の諸理念〔神

91 Чистович. История. С. 196.

92 Lin Martin, "The Power of Reason in Spinoza," in Olli Koistinen, ed., *The Cambridge Companion to Spinoza's Ethics* (Cambridge: Cambridge University Press, 2009) を参照。

93 Чистович. История. С. 194.

の理念] から自己の一般諸理念を産出し、可能な限り完全に意識の鏡を通じて悟性に反映する<sup>(94)</sup>」ものとされ、振り返って、この悟性は、この理性から受けとった一般諸理念と感覚表象を結合して概念を形成するものと位置づけられているからである。要するに、フェスラーは、カントのいうアприオリな直観・悟性形式を産出する源泉として、理性に内在する「神」の理念の観想を位置づけているのである。

フェスラーの「理性」観がカントのそれから決定的に分かれるのは、前者の理性が、カントのいう叡知界を「観る」ことができると考えている点である。上述したように、フェスラーの悟性による認識はカントと同じく感覚的世界だけに限定されているのに対して、フェスラーのいう理性は、明確にカントがいう叡知界を（カントのように実践ではなく）<sup>テオリア</sup>観想の対象としているのである。フェスラーによれば「観想する理性の直接的活動の対象は不可視で永遠の神的な世界である<sup>(95)</sup>」という。それゆえ、フェスラーは、悟性による感覚世界についての制約された「認識」と、理性による不可視の超越的世界についての「知識」との対比を次のように説明する。

私の考えでは、理性に本来的に備わっている永遠の本源的な無限かつ全体なる神の理念こそが、主観的かつ客観的な実在 (realitatem) であり、理性が観る真理と明証性であり、〔逆に〕これら理念を用いて悟性が形づくる諸概念のほうは、制約された実在・真理にすぎないのである。<sup>(96)</sup>

この理性と悟性とがそれぞれ対象とする二つの真理は、フェスラーの哲学観の二つの側面を構成していた。ヴォルフにとって哲学とは、学問であり、最も確実で明晰な知識を得るための熟練であった。カントは、ヴォルフが「哲学」の枠内で理論的に論証しようとした「神」についての認識を、実践理性の自由な道徳的实践(信仰)の対象として切り分けることで、ヴォルフ的な形而上学的「神」認識を哲学的悟性的認識対象から除外した。フェスラーの場合は、「哲学」とは、ヴォルフ形而上学から切り分けられたカント的な学的認識を従属項として含むとはいえ、それを包摂するところの、宗教と理性に先導された心の熟練あるいは実践的生活態度全体を意味していた。カントが人間の認識能力(哲学)の限界を踏まえて、あくまで人間の実践理性から信仰対象を措定するのに対して、フェスラーは、逆に信仰を出発点として哲学の役割を宗教へと接近させるために、信仰の統制的機能を全面的に人間の精神活動全体へと拡張しようとした。これは、宗教の内容を哲学的に正当化・弁証しようとする点で自然神学あるいは宗教哲学と呼ぶべき思想的構えであるが、だからといって同時代のフリードリヒ・ヤコービの信仰主義やフリードリヒ・シュライアマハーのように心情・感情を理論的な土台にすえることもなく、あくまでも人間の、普遍性を志向する「理性」から「哲学」を通じて精神的完成つまり「神」に接近するという姿勢を堅持している。それゆえ、フェスラーが神学生達に教授した「哲学」とは、次の引用に示されているように、信仰的生活を含み込

94 Чистович. История. С. 194.

95 Чистович. История. С. 194.

96 Чистович. История. С. 194.

んだ「哲学的生活」と呼ぶべきものであり、その完成態は限りなく啓示宗教（しかも単一普遍的）に接近するはずのものとされた。

私が哲学と呼ぶものとは、理性の明晰な知識と、霊性の最も活発な活動のことである。宗教はこの〔霊性の〕活動の光であり活力源であると私は考えている。霊性の完成とは、理性、悟性、想像力、内的感覚の相互の調和的一致にあると考えており、哲学の完成とは、それ〔哲学〕がイエス・キリストにおいて世界に啓示された単一・普遍・永遠の神的宗教と完全に一体化・相似化することであると見なしている。<sup>(97)</sup>

フェスラーの「哲学的生活」において、理性が悟性を先導する関係性についてはすでに述べた通りだが、それ以外の精神活動との相互関係、つまり理性・悟性・想像力・内的感覚の相互関係については、次のようなプロティノス流の新プラトン主義に特有の「流出—還帰」の関係として捉えられていた。

理性が、形式なき神的世界において無限で無制約で未規定のものとして観想するもの〔つまり神の理念〕を、悟性は意識において概念を通じて深化させ、ある種の形式と規準へと導き、限界づけ、一定の境界内へと囲い込むのに対して、想像力はそれ〔神の理念〕を諸形象へと形づくり、内的感覚はあらゆる愛と願望を通してそれ〔神の理念〕を目指すのである。<sup>(98)</sup>

つまり、理性が捉えた茫漠とした「神」の理念を、悟性が概念化し、想像力が形象化した上で、今度は内的感覚がそれら神の概念と形象とを欲求の対象とすることで再び「神」の理念へと還帰するという構図である。したがって、フェスラーにとって「哲学」とは、単なる学的な理論的認識活動ではなく、「神」との一体化をめざす生活実践そのもの、いわば神的智慧への愛という意味でのフィロソフィアであった。

さらに彼は、このような哲学の本質的な側面を、哲学の「第1の側面」と呼び、「それ〔哲学〕は魂（mentis）の状態・熟練、あるいは内的生活の原理」であり、「それ〔哲学〕は外部から借用してはならず、つまり教えることも教わることもしてはならないものであるから、したがってこの点で、それ〔哲学〕は完全に内的なものである<sup>(99)</sup>」と定義する。つまり、フェスラーの「哲学」の第1の側面とは、人間の内在的な心術全体にかかわるものであった。同時に、彼は自らの「哲学」から既存の学校的哲学を排除せず、それを「哲学」の第2の側面と呼び、「それ〔哲学の第2の側面〕は、推論する悟性の純粋な産物でもあり、それゆえ学校の教科——学術的研究の素材、哲学することの手本である<sup>(100)</sup>」と定義する。つまり、「哲学」の第2の側面とは、教科・学術研究としての「哲学」であり、それは第1の側面の哲学＝愛智的生活が自律的・内在的に獲得すべき心術であるのとは対照的に、教材や手本を通し

97 Чистович. История. С. 193.

98 Чистович. История. С. 193–194.

99 Чистович. История. С. 195.

100 Чистович. История. С. 195.

て教えたり教えられたりすることができるものである。このような広義の「哲学」の2つの側面をフェスラーは次のように定式化している。

第1の側面での哲学を、自立したもの、独立したもの、永遠の無限者〔神〕への観想と知識、靈性の愛と呼ぶことができる。第2の側面での哲学を、私は、諸理念と諸概念を媒介にして理解し想像することができる諸存在者の存在についての推論する悟性の認識として定義する。〔この第2の側面について〕私が、(1) 知識 (scientia) ではなく、認識 (cognitio) と呼ぶのは、正しい推論つまり論証を通じて手にするのは知識ではなく認識にすぎないからである。〔私が〕(2) 推論する悟性の認識と呼ぶのは、それ〔悟性認識〕を、観想する理性の知識と区別するためであり、我々が、哲学の単なる形式にすぎないそれ〔悟性認識〕を、哲学〔愛智〕的生活、すなわちその〔哲学的生活の〕至高・至福の状態および人間精神の熟達とは異なるものとして識別するためである。<sup>(101)</sup>

ここでいう悟性の概念的な「認識」と理性の観想の対象としての「知識」という区別は、カント的にいえば、現象界の悟性的認識と、叡知界での実践理性による道徳的实践との区別に対応している。だが、後者を、事象の確実な論証・実証のための熟達性という意味での「学問 (scientia) <sup>(102)</sup>」というヴォルフ派特有の用語で表現したことが、その後、ヴォルフ派の用語法を偽装しているというフェオフィラクトからの非難を呼ぶことになる。しかし、フェスラーからすれば、ヴォルフの体系は内容面で自分の広義の哲学の一部（第2の側面）として組み込まれているのであり、必ずしもヴォルフ派哲学を蔑ろにするものではなかった。だが、ヴォルフの形而上学体系を批判した純粹理性批判（つまり悟性の認識能力の限界）と実践理性による道徳的生活の優先というカント的モチーフをヴォルフの用語法を使って表現していたことには間違いのないのである。

こうしてみると、フェスラーが「私は自分の授業で、プラトン主義、アリストテレス的スコラ学、ヴォルフ派の折衷体系、カントの批判主義を重視した <sup>(103)</sup>」と述べた意味が明確になる。彼は自分の「哲学」をプラトンの神学的イデアの観想を端緒とする哲学的生活として根本的に定義し、アリストテレス的スコラ哲学を援用して独自の存在論的形而上学体系を構築したヴォルフの枠組みと用語法を利用しつつ、カントによるヴォルフ批判としての純粹理性批判と純粹実践理性の要請を自らのプラトン主義（プロティノス的新プラトン主義）の大枠に組み込んだのである。それは、ストア派の道徳的人生観とともにスピノザ的な一元論的認識および理性主義に類似するものであった。その意味で、彼は、創造主と被造物との間に架橋不可能な断絶を想定する立場とは異なり、両者を連続性において捉える新プラトン主義的一元論の立場に立っていた。これらの諸要素は、彼がロシアに赴任する以前の思想形成

101 Чистович. История. С. 195.

102 ヴォルフによれば、「学 (scientia)」とはある言明を確実な原理から正しい推理を通じて論証するための練達性 (habitus) のことであり、この練達性は経験的な訓練を通じて獲得されるものであった。山本道雄「クリスティアン・ヴォルフ」36頁。故にヴォルフの「学」とフェスラーの「知識」とは別次元のものである。

103 Fessler, Dr. Fessler's Rückblicke, pp. 223–224.

過程を反映するとともに、「ヴォルフ派哲学」に従った講義をおこなうべしという神学校委員会による指示を考慮した結果であった。

## 6. フェオフィラクトのフェスラー批判：「感覚軽視の新プラトン主義者」

「教会と祖国の利益を庇護する責任者」を自認したフェオフィラクトは、神学校委員会に「フェスラーの哲学授業概要への論評<sup>(104)</sup>」を提出し、次の5つの論拠を挙げてフェスラーを批判した。第1の論拠は、「フェスラー氏は、人間の認識原理を感覚から独立した理性から導出することによって、人間の認識の自然な過程を歪曲している<sup>(105)</sup>」というものである。この批判は、ヴォルフの認識論の端緒である「事実的認識」論、つまり「感覚 (sensus) によって我々は、物質的世界に存在し生起するものを認識する<sup>(106)</sup>」という命題に立脚するものである。だが、実はヴォルフ自身は感覚による事実的認識とは区別して、感覚によらずに推論によって存在の根拠 (ratio) を認識する「哲学的認識」と、その根拠の量的規定性を認識する「数学的認識」を事実的認識よりも上位にある一層確実な認識として位置づけており、フェオフィラクトの主張はヴォルフに照らし合わせてみれば、あまりにも「感覚主義」的な見方であった。しかし、「心理作用の内的感覚と、外部からの印象の感覚」を哲学の土台としたアリストテレス、ベーコン、デカルトの伝統にヴォルフ自身も立脚しているとなし、いたフェオフィラクトの眼から見れば、超感覚的原理から出発するフェスラーの哲学は、ヴォルフ派的な「健全な哲学<sup>(107)</sup>」からの逸脱と映ったことも理解できる。さらにフェオフィラクトは、フェスラーのいう生得的理性が不可視の世界を観想できるとした点を批判して、「もし人間が幼児期から感覚を欠いているならば、神についての概念だけでなく、自己自身についての概念も得られないだろう<sup>(108)</sup>」と断言する。彼は、パウロの「世界の創造の時以来、目に見えないものの本質とは、その永遠の力であり神性であるが、それは被造物を介して考えることができ、見ることができるのである」(ローマ書 1:20) を解釈しつつ次のようにフェスラーを批判した。

それゆえ、物質的世界だけでなく、霊的世界も、被造物によって認識されるのであり、それはまさに感覚を通じてである。同じ感覚を通じて、神は自らの意志を旧約聖書の族長達に啓示したのであり、贖罪という私達の偉業も感覚的な形態で成し遂げられたのである。かくして、フェスラー氏によって作り上げられた理性と悟性との恣意的な区分はいかなる善ももたらさないのである。<sup>(109)</sup>

このようにフェオフィラクトは、哲学的次元での議論において聖書の特定の解釈を自らの

104 *Феофилакт. Замечания. С. 115.*

105 *Феофилакт. Замечания. С. 115.*

106 山本道雄「クリスティアン・ヴォルフ」17頁。

107 *Феофилакт. Замечания. С. 116.*

108 *Феофилакт. Замечания. С. 116.*

109 *Феофилакт. Замечания. С. 117.*



論拠として持ち出すことで彼のいう（感覚重視の）「健全な哲学」を擁護しようとしたのである<sup>(110)</sup>。

フェオフィラクトの第2の批判点は、フェスラーが「人間の認識原理を専ら主観的に制約された実在と真理だけに帰着させることによって、虚偽の、常識とは相容れない人間の認識原理を容認している<sup>(111)</sup>」ことに向けられた。この論点は、フェスラーのいう感覚世界の悟性による概念的な「認識」だけを念頭においたものであり、フェスラーのいう観想する理性による諸理念の「知識」、つまり「主観的かつ客観的な実在と真理」についての議論を捨象したものである。そのうえでフェオフィラクトはたたみかけるように次のように展開する。

哲学者の仕事・研究の対象とは客観的な実在と真理である。しかし、フェスラー氏は主観的なものだけに留まることによって客観的な実在を無視し、そのことによって自ら明確に“イデアリスト”を標榜している。彼の見解によれば、思惟と存在とは同じ意味をもつ“術語”であり、それゆえ、存在しているのは、ただ内面的に思惟可能なものとして意識されているものだけなのであり、外部から私達に作用する対象は、制約された実在ですらなく幻想にすぎない。このような哲学は光ではなく闇を蔓延させるものである。<sup>(112)</sup>

フェスラーの哲学を思惟と存在の同一性という点で捉えることは的外れではないが、この立場は実はヴォルフの観点でもあった（だからヴォルフはかつてスピノザ主義と非難された）。フェスラーの立場から見れば、カントの積極的意義とは、思惟と存在を無批判に同一視したヴォルフ哲学（存在論＝認識論＝論理学）に対して、人間の認識能力の限界、つまり思惟による存在（物自体）を把握することの不可能性を主張した点にあった<sup>(113)</sup>。このカントを踏まえたくてフェスラー自身は、カントの不可知論を取って乗り越えようとする立場から超越的理性の観想による物自体＝存在の把握可能性を主張した。したがってフェオフィラクトは、フェスラーのポスト・カント的なモチーフを完全に看過していたのである。

さらにフェオフィラクトによるフェスラー批判の残りの3つの論点は、哲学的論駁の域を超えて完全に「異端」弾劾の論調を帯びていた。フェオフィラクトによれば、第1にフェスラーは「イルミナティの見解」を採用することで「宗教の土台を覆しており<sup>(114)</sup>」、第2に彼が導入しようとした「プラトン哲学」とは「1～3世紀のキリスト教において異端を生み出した」源泉であり、第3に彼が指針とした「[新プラトン主義者の]プロティノスの説」はローマ帝国の「異教徒の皇帝達の特別な庇護をうけていた」ものであったという<sup>(115)</sup>。これらの

110 この感覚重視の立場からフェオフィラクトは、カントが批判していたスヴェーデンボリの霊界論を逆に高く評価していた。P. M. Из прошлого. С. 491.

111 *Феофилакт*. Замечания. С. 115.

112 *Феофилакт*. Замечания. С. 117.

113 フェオフィラクトはカントの哲学を「無神論」だと非難し、フェスラーについてもカントの追随者だと主張した。*Феофилакт (Русанов)*. О Кантовой философии // Чтения в Императорском обществе истории и древностей Российских при Московском университете. 1859. кн. 2. V. Смес. С. 124.

114 *Феофилакт*. Замечания. С. 115.

115 *Феофилакт*. Замечания. С. 116.

論難は、フェスラーを哲学的・内在的に批判するのではなく、「正統な教会」の立場から他者を外在的に裁断するような性格のものであった。それだけに、フェオフィラクトの非難は、当時のロシア正教会高位聖職者の「プラトン」や「プロティノス」に対するある種の「正統な」見方を鮮明に反映していたともいえる。

まず「イルミナティ」に関して検討してみよう。フェオフィラクトが非難したのは、バイエルンの秘密結社・<sup>イルミナティ</sup>光明会のことではなく、16世紀半ばにスペインで摘発されたアルンプラードス<sup>(116)</sup>を指していた。彼によれば「この異端は、瞑想と知的祈祷によって神的なものと密に合一することで全くの罪なき状態になることができる」と主張して、教会の機密を無意味なものにしたという。その意味で哲学と宗教との一体化をめざすフェスラーの思想は、理性によって教会の存在意義を否定する点で「イルミナティ」思想を採用した結果であると断定されたのである<sup>(117)</sup>。ここには、人間の理性主導の哲学が、超越的絶対者を崇拜する宗教と融合し、人間と「神」との合一を志向することによって「神」と人間との仲介者を自認する教会聖職者の存在意義を無効化してしまうことに対する高位聖職者の危機意識が表れていた。これに関連してフェオフィラクトは、フェスラーが「宗教」を「普遍的で永遠である」と表現したことを取り上げた。「彼〔フェスラー〕がここで何らかの〔キリスト教とは〕別の宗教に言及していることは疑いない。なぜなら、キリスト教をこのように〔普遍的で永遠であると〕言うことはできないからである。同様に彼は、世界をも『永遠で神的である』と称し、そのことによって創造主と被造物とを混同し、聖書〔の教え〕と対立している。なぜなら聖書では、世界の始まりと創造が説明されているからである。」

この論点によってフェスラーには「スピノザ主義」の嫌疑がかけられる。なぜなら、キリスト教の「正統な」教義によれば、「神」自身は永遠であるが、「神」が創造した被造世界と宗教は、始原と終末をもつ有限なものである。したがって、フェスラーが宗教を「永遠」と形容したことは、明らかに教義から逸脱していると思われた。さらに、フェオフィラクトは、フェスラーの聴講生の講義録に「一つの全体、一つの生命、世界のあらゆる諸現象は、一者の反照、つまり同一の実体が無限に変容したもの、あるいはその〔実体の〕諸態様のようなものに他ならない」と記されていた点を取りあげて、このような教説はまさに「観念的スピノザ主義」だと論断したのである<sup>(118)</sup>。

さらにフェオフィラクトは、フェスラーが「プラトン哲学を堅持しよう」とした点をも問題にした。しかし、教会教父も盛んに援用したプラトン哲学の堅持が、なぜ非難されるのだろうか？なぜなら、フェオフィラクトによれば、「夥しい異端達が他ならぬプラトン哲学の追随者」であり、イエスの神性を否定したグノーシス諸派の思惑の背景にも「プラトン哲学を宗教と結合させようという悪しき願望」があったからだという。フェオフィラクトによれば、たしかに教会教父の一部の者達はプラトンを利用したが、それは「プラトン哲学に執着

116 アルンプラードスはキリストの介在なき神との合一を唱えた宗派である。假名垣宏「外来文化・思想とスペインの土着的風土(II):アルンプラードスを生んだ土壌」『東海大学紀要・外国語教育センター』第4号、1983年、67-78頁を参照。

117 *Феофилакт. Замечания.* С. 118.

118 *Феофилакт. Замечания.* С. 119.

していたユダヤ教徒や異教徒に、彼らが神格化していたプラトンも多くの点で使徒の宣教に類似していることを証明しよう」としたからであり、彼ら教父達は「不信心者」の「治療」にあたっては「時に彼らを瞞着することも非難に値しない」と考えて「プラトン」の名を利用したにすぎなかったと説明した<sup>(119)</sup>。

最後に、フェオフィラクトは、フェスラーが「プラトン主義の改造者」である「プロティノス」を指針としていたことを取り上げた。彼によれば、プロティノスの師アンモニウス・サッカスは、「魔術師<sup>マゴス</sup>シモン」の兄弟弟子で、アンモニウス自身も「哲学を神学・魔術と融合させた」人物であり、プロティノスの兄弟弟子のポルピュリオスは「キリスト教の敵」であると指摘し、プロティノスと「異教」や「異端」と密接な人間関係を印象付けた。さらにプロティノスの辞世の句「すでに私の内にある神性と世界の内にある神性とを合一させるべく最後の努力をおこなうべき時がきた」を取り上げ、ここには「スピノザ主義」と同じ「世界魂」思想、「汎神論」が潜んでおり、それは「無神論」と同義であると主張した。彼によれば、プロティノスらアレクサンドリア学派は、総じてキリスト教を憎悪し、偶像崇拜を保持しようとしており、このアレクサンドリア学派の誘惑により「背教者ユリアヌス」は偶像崇拜に転向してしまった。またプロティノス哲学の原理によれば「全ての諸宗教は同一の特徴をもつ」とされたが、それは彼の師アンモニウスによる「全ての諸宗教を一致させ」、「一つの普遍宗教へと融合させようとする」企図によるもので、この企図こそフェスラーが授業概要で予告したことと同じであるという<sup>(120)</sup>。

フェオフィラクトによれば、その後、コンスタンティヌス大帝を筆頭に「敬虔な君主達」がキリスト教へ回心し、アレクサンドリア学派の伸張を阻止し、多くの「汎神論者達」を処刑した結果、5世紀初頭には「改造プラトン主義」の唯一の支柱はアレクサンドリアの女性哲学者ヒュパティアだけとなった。そしてこの最後の「新プラトン主義者」が民衆によって石打・八つ裂にされたうえで焚刑に処されたことで、プロティノスの教えは抹殺されることになったと思われたが、それは再び17世紀のアムステルダムでスピノザを通じて復活し、18世紀以降、「唯物論者」や「観念論者」の名で継承されたという。このように「敬虔な君主達」が何百年かけても根絶できなかつたほど、この「新プラトン主義哲学」は手強いものである。以上のようにフェオフィラクトは、キリスト教と「新プラトン主義」との壮絶な闘争の歴史を描き、それに重ね合わせるかたちで、フェスラーがロシアの学生達に「理神論者と無神論者の体系全体」を教唆したのであると断罪した<sup>(121)</sup>。

以上の議論から明らかなようにフェオフィラクトにとって「新プラトン主義」、「スピノザ主義」、「汎神論」、「唯物論」、「観念論」、「理神論」は「無神論」とほぼ同義であり、いずれも彼の考える「キリスト教」に敵対するものとみなされていた。

このようなフェオフィラクトのフェスラー弾劾に対して、スペランスキイは、神学校委員会に提出した論評で次のよう反論した。

---

119 *Феофилакт. Замечания. С. 119–120.*

120 *Феофилакт. Замечания. С. 120–121.*

121 *Феофилакт. Замечания. С. 122.*

神学大学学則での哲学教育の目標は、精緻な理性であって、あらゆる感覚哲学が立脚している忌まわしい唯物論の体系を存続させることにあるのではない。つまり、哲学教育の目標は「…」理性を喚起してキリスト教哲学を育てることにある。このキリスト教哲学とは、聖パウロの言葉によれば、世界の自然力スチヒヤによるものではなく、永遠の真理の原理によるものであり、この真理は一つであり、その源泉を、私達が目に見え、耳に聞こえ、手で触り、その他の感覚器官で感じることのできるものとして探そうとしても無駄なのである。<sup>(122)</sup>

つまり、フェオフィラクトの感覚重視の経験論に対して、スペランスキイは感覚を超越した神的アイデアを追求する生得的理性の営みとして「キリスト教哲学」を対置したのである。神学校改革の出発点においてこの二人はヴォルフ派的な自律的思考を重視する改革派として協調的な関係にあったが、改革遂行過程の中で両者の間にあった思想上の差異がフェスラーの評価を巡って顕在化したのである。

他方、フェスラー自身は自伝の中で、フェオフィラクトによる自分への批判は破綻しており、彼が自分の哲学授業を正しく理解できず、また批評する能力もないことを示しており、それゆえ「このような敵と争いたくなかった」と回顧している<sup>(123)</sup>。

両者の対立を、後にチストーヴィチは、フェスラーとスペランスキイの「神秘哲学」とフェオフィラクトの「実証哲学」との相違であったと解説した<sup>(124)</sup>。しかし、彼は自分の『神学大学史』では、フェオフィラクトによるフェスラー批判の後半の3つの論点、教会史の観点からプロティノスら新プラトン主義に重ね合わせてフェスラーを弾劾した部分を省略していた<sup>(125)</sup>。彼は、フェオフィラクトがフェスラーをプラトン哲学と宗教とを融合させた「異端」や「キリスト教の敵」と重ね合わせて弾劾した部分を自分の『神学大学史』に記載することは不適切であると判断したのである。このことは、神学大学でのチストーヴィチの哲学の指導者が、ロシアで初めて『プラトン著作集』をロシア語に翻訳したカールポフであったことと無関係ではないだろう。

## 7. フェオフィラクトの失脚とその後のフェスラーの威信

フェオフィラクトがフェスラーの授業概要の一節「神の国—光と愛の国、つまり恩寵の国は私達の内にある<sup>(126)</sup>」を取りあげて「イルミナティ」として論難したことは、フェスラーを招聘したスペランスキイや彼に傾倒したゴリーツィンの思想をも非難するものと受け止められた可能性がある。結果としてフェオフィラクトはスペランスキイとゴリーツィンからの信任を失い、社交界でも「啓蒙の火消し役」という悪評が立つようになる<sup>(127)</sup>。その背景に

122 Чистович. Руководящие деятели. С. 51–52.

123 Fessler, *Dr. Fessler's Rückblicke*, p. 224.

124 Чистович. Руководящие деятели. С. 52. この解説は、チストーヴィチの同時代の用語法を適切的に当てはめたものであって、当時はコントの「実証哲学」は成立していなかった。

125 Чистович. История. С. 197–198.

126 Феофилакт. Замечания. С. 118.

127 П. М. Из прошлого. С. 508–509.

は、スペランスキイ、ゴリーツィンのいずれもが同時代のヨーロッパで台頭したキエティズムやピエティズムなど内面的信仰重視の神秘主義的な傾向をもった超宗派的普遍宗教に共感をもっており、フェオフィラクトの18世紀的な感覚主義的・経験論的思考に対して批判的だったという事情があった<sup>(128)</sup>。つまり、神学校改革当初は、国家による聖職者養成の合理的紀律化という18世紀的「啓蒙」の観点からフェオフィラクトは教会守旧派に対抗する改革派として抜擢されたが、改革の進展の中で「啓蒙」をより外面的・経験論的に理解するのか、より内面的・神秘主義的に理解するのかを巡って分岐が生じる中で、前者の感覚論的立場に対して後者の超越論的立場が主導権を握ることになったのである。その場合、前者を代表したのが高位聖職者で、後者を代表したのが世俗政治エリートであった点に、アレクサンドル時代の「神秘主義」的雰囲気の特徴がよく表れている。さらに留意すべき点は、フェオフィラクトのフェスラー批判は、正教会の聖職者がルター派の信徒を論駁するという同じキリスト教宗派間の「論争」ではなく、むしろキリスト教一般に対立する「異端」を糾弾するという姿勢が顕著だったことである。したがって、フェスラーの人事問題の背景にあったのは、正教会とルター派との宗派間対立ではなく宗派帰属を超越した次元での思想と人間関係をめぐる複合した対立構造であった。正教会聖職者のトップであるペテルブルク府主教アマヴロシイがフェスラーを庇護したことを想起するならば、フェスラーを巡る対立を宗派信条や国籍の相違あるいは聖俗対立へと還元できないことは明らかである<sup>(129)</sup>。

フェオフィラクトの代わりにゴリーツィンが新たに引き立てたのは若い修道司祭フィラレートだった。彼は、学長の補佐役として1810年2月に神学助教授に昇任した後、府主教アマヴロシイの後押しで同年3月に「人間の魂の内なる神の国」という信仰の内面性を重視した説教をおこなう。フェオフィラクトはこの説教を「汎神論」だと厳しく非難したが、逆にアマヴロシイはフィラレートの説教のテキストをゴリーツィン総監に送付し、これを読んで感銘を受けた総監は、アマヴロシイに今後の全ての祭日の説教はフィラレートに任せるよう依頼し、祭日のたびにフィラレートの説教を聞きに出かけるようになる。こうして1811年6月にフィラレートはゴリーツィンの推挙で皇帝から「素晴らしい説教」に対する褒賞として十字勲章を授与され、さらに掌院に昇任したのである<sup>(130)</sup>。その後、フェオフィラクト派とアマヴロシイ派との抗争に翻弄された神学大学学長が辞職を申し出て、彼の後任人事をめぐってフェオフィラクトが推すレオニードと、アマヴロシイが推したフィラレートが争ったが、結局、ゴリーツィンの支持によってフィラレートが1812年3月に次の学長に任命される。もっとも、同じ時期にスペランスキイが外政問題で失脚し、神学校委員会ではフェオフィラクトの権勢が一時高まったが、6月にロシアに侵攻したナポレオン軍が12月に撃退されると、蹂躪された西部諸県の教区を再建するという大役がフェオフィラクトに委任される。彼は、翌1813年3月まで教区再建に取り組み、任務を完了したとして首都帰還を求め

---

128 Кондаков Ю.Е. Либеральное и консервативное направления в религиозном движении в Русской православной церкви первой четверти XIX века. СПб., 2005. Гл. 1. [http://www.herzen.spb.ru/uploads/m1cha/files/3.pdf] (2014年12月28日閲覧)

129 フェスラーの「正教」観は別途検討を要する重要な問題であるが本論では割愛する。

130 Чистович. Руководящие деятели. С. 46, 54.

たものの、ゴリーツィンはそれを却下し、結局、フェオフィラクトが首都に帰還できたのは5月になってからであった<sup>(131)</sup>。その後9月になってフェオフィラクトが監修・出版したアンセリョーン<sup>(132)</sup>の『美学論』露語訳が、アムヴロシイによって「不適切だ」と告発される。10月にはアムヴロシイの意を受けたフィラレートが同書を「汎神論で自然主義」であると非難する書評を出版する<sup>(133)</sup>。結局、フェオフィラクトは、ゴリーツィンが提出した神学大学での内紛に関する全資料に目を通した皇帝自身の裁定によって1813年11月に本来の任地リャザンに戻るように命じられ、12月には宗務院理事も罷免され、彼の没落は決定的になった<sup>(134)</sup>。

フェオフィラクトの失脚は、神学校・神学大学の教育課程にも影響を及ぼした。美学担当のレオニードが彼の後見人フェオフィラクトの失脚直後に「急死」したこともあって、彼が授業で用いたブーチェヴェクの教科書も「不適切である」という理由で教科書指定を解除され、美学授業自体も「神の御言葉を教えるために修学している神学生にとっては全く無益である」という理由で廃止された<sup>(135)</sup>。こうしてフェオフィラクトの影響力が完全に抹殺される中で、学長フィラレートに学則の最終改訂（1814年）が委ねられる。神学校でも歴史と美学の授業が削除され、神学大学では物理、数学、世界史、地理などが選択科目へと格下げされるなど実質的にフェスラーの提案に沿って多くの必修科目と授業時間が削減された<sup>(136)</sup>。

他方、フェスラーは教授解任後も中央政界との結びつきを維持していた。彼は、1811-1815年にかけて、ヴォリスク、サラトフをへて、ドイツから来たヘルンフト派の入植拠点サレプタ（現ヴォルゴグラード郊外）に移住する。また1815年にサラトフを拠点にして独立系メイソン会所を設立し、そこにはドイツ系官僚だけでなくロシア人の軍人・官僚も加入していた<sup>(137)</sup>。つまりフェスラーは、正統派ルター派教会から分かれた敬虔主義的なドイツ人が多数入植していた沿ヴォルガ地方を新たな活動拠点としたのである。また1817年には皇帝の命令でフェスラーの息子が授業料免除でツァールスコエ・セロー学習院に入学を認可された。1818年には、国民教育・宗務省大臣ゴリーツィンによって福音派教会にも他の公認宗派<sup>(138)</sup>と同等の権利、つまり主教に相当する教区監督職と教会会議が承認され、牧師

131 *Чистович*. Руководящие деятели. С. 65, 76.

132 フリードリヒ・アンセリョーン（1767-1837）は亡命フランス人作家でプロイセン皇太子の養育係。

133 *П. М.* Из прошлого. С. 509-510; *Чистович*. Руководящие деятели. С. 78-80; *Кондаков Ю.Е.* Архиепископ Феофилакт (Русанов) и митрополит Амвросий (Подобедов) во внутрицерковном соперничестве в начале XIX в. // XV Ежегодная богословская конференция ПСТГУ: Материалы. 2005 г. Т. I. М., 2005. С. 226-229.

134 *П. М.* Из прошлого. С. 511-512; *Чистович*. Руководящие деятели. С. 81; *Кондаков*. Архиепископ Феофилакт. С. 229.

135 *Гавлюшин*. Мистический неозеллизм и идеал «эстетической Церкви». С. 146; *Чистович*. Руководящие деятели. С. 132; *Кондаков*. Архиепископ Феофилакт. С. 229. しかし、リャザンでフェオフィラクトの指導を受けたナデージュゼンは1830年代以降、プラトン主義と美学とを結びつけた思想を新たに展開する。下里「あるロシア正教神学生の自己形成史」を参照。

136 *Титлинов*. Духовная школа в России. Вып. 1. С. 41-42.

137 *Попов*. Игнатий-Аврелий Феслер. С. 637.

138 具体的には、正教会、ローマ・カトリック教会、ギリシャ・カトリック（ユニアート）教会、アルメニア使徒教会、イスラームである。Werth, *The Tsar's Foreign Faiths*, p. 50.

には国庫による俸給を支給することが決定されたが、ルター派教会サラトフ地方教区の監督職に任命されたのが他ならぬフェスラーであった。サラトフ地方教区の管轄領域は沿ヴォルガ地方全体に及び、ルター派の地方教区としては当時、世界最大の規模であったという<sup>(139)</sup>。

しかしながら、国民教育・宗務省を通じて正教会を含め帝国内の諸宗派を国家が統一的に保護・統制しつつ、聖書協会を通じて超宗派的キリスト教を普及させようとしたゴリーツィンの宗教政策は、正教会の守旧派を中心とする巻き返しを呼び起こすことになった。1822年のフリーメイソン会所禁止令に続き、1824年にはゴリーツィンが大臣職を罷免され、彼が会長を務めた聖書協会も閉鎖となる。正教会の守旧派の先鋒に立った掌院フォーティ(ピョートル・スパスキイ)はゴリーツィン弾劾上奏文の中でフェスラーを「イルミナティ」の一員として糾弾し<sup>(140)</sup>、またゴリーツィンに代わって国民教育大臣になったアレクサンドル・シシコーフもフェスラーを「異端の宣教」の罪で告発した<sup>(141)</sup>。しかし、いずれも却下され、逆にフェスラーは1832年制定の「在ロシア福音派・ルーテル派教会規約」の原案起草に参画するとともに、1834年には教会助言者の職位で首都に戻っている<sup>(142)</sup>。これら首都での宗教政策の画定にフェスラーが関与できた背景にはアレクサンドル時代に形成された彼の人脈が維持されていたことを示しており、また守旧派の攻勢が一過的なものだったことを示唆している。なぜなら、すでに1821年に復権したスペランスキイは、皇帝がニコライに代わった後にも重用され続けていたし、シシコーフの後継として1833年に国民教育大臣に抜擢された(フェスラーと旧知の)セルゲイ・ウヴァーロフもアレクサンドル1世時代の超宗派的キリスト教の観点からロシア正教以外の諸信条に対しても寛容な姿勢を持ち続けていたからである<sup>(143)</sup>。

## 結 論

フェスラーが僅か半年で神学大学を追われた背景には、神学校改革の実施過程の中で、フェオフィラクトの感覚重視の経験論的な立場と、フェスラーを支持したスペランスキイの自律的理性重視の姿勢との対立が表面化したことと同時に、アムヴロシイとフェオフィラクトと

---

139 Попов. Игнатий-Аврелий Феслер. С. 637; Горбачев. И.А. Феслер. С. 223; № 27.953(1819). 25. Окт. Об учреждении Евангелической консистории в Саратове // ПСЗ. Т. XXXVI, С. 362.

140 Пытин. Религиозные движения. С. 216.

141 Шишков А.А. Записки Адмирала Александра Шишкова // Чтения в Императорском обществе истории и древностей Российских при Московском университете. 1858. кн. 3. II. С. 46.

142 その後、フェスラーは1839年にペテルブルクで没した。Горбачев И.А. Феслер. С. 224. ちなみにフェオフィラクトは1816年にフェスラーが滞在していたサレプタで彼と和解したという。Barton, *Ignatius Aurelius Fessler*, p. 454. フェオフィラクト自身は1817年に併合されたグルジアの正教会のエクザルフ(総主教代理)に転任し、1821年に同地で没した。Смолич. История русской церкви. Ч. 2. С. 240.

143 正教会守旧派の巻き返しについては、Werth, *The Tsar's Foreign Faiths*, pp. 43–44. ウヴァーロフについては、下里俊行「1830年代のロシア保守思想家達の『ナロードノスチ』概念の再検討」『ロシア史研究』第95号、2014年、7頁を参照。

いう高位聖職者同士の権力闘争が複雑に作用していた。プラトン哲学の重要性を最初に唱えたフェスラー自身は、そのプラトン哲学が糾弾されて追放されたが、この糾弾と追放を主導したフェオフィラクトが失脚すると同時に、逆にプラトン哲学が復権し、その結果として「プラトン」の名が神学大学学則に挿入されたのである。このことは、神学校改革関係者が、当初からスペランスキ起草の学則総論で掲げられていた理性＝内面的自律性の重視の教育方針を尊重したと同時に、フェオフィラクトの感覚中心の経験論（反プラトン主義）を拒否したことを意味していた。本論が扱った時期は、従来、18世紀の啓蒙思想から19世紀のロマン主義への過渡期としての「神秘主義」の時代として位置づけられてきた<sup>(144)</sup>。しかし神学大学の教育課程をミクロに分析する中で浮き彫りになったフェオフィラクトの思想的立場は、18世紀にロシアで大きな影響をもったヴォルテール主義的な経験論がヴォルフ派的合理主義と結びついて19世紀の初めにも一部の聖職者の中で依然として大きな影響力をもっていたことを示唆している。この点を精査するためにはフェオフィラクトが教育を受けた18世紀後半のペテルブルク高等神学校の教育課程を分析する必要があるが、ドイツでの18世紀末のカント以降のイデアリズムの勃興と連動した19世紀初頭のロシアでの神学大学の哲学の基調として台頭したプラトン主義は、前世紀の思潮に対する反命題として確立したことは間違いなく、このような思想史的ダイナミズムがフェスラー追放とフェオフィラクト失脚の背後で作用していたのである。いずれにしても、学則を起草した学長フィラレートと彼を支持した府主教アムヴロシイにとって「プラトン」の名の学則への明記は、フェスラー追放の主導者フェオフィラクトの復権を遮断するための象徴であった<sup>(145)</sup>。したがって、正教神学大学の哲学的伝統の起源としてのプラトン主義は、学則起草者フィラレートにフェスラーが影響を及ぼしたという側面（ガブリエーシン説）も否定できないが、むしろフェオフィラクトの感覚的経験論、哲学と信仰とを分離するという意味での「反プラトン主義」に対するアンチテーゼという趣旨も濃厚であった<sup>(146)</sup>。総括的にいえば、表面上はフェスラーを神学大学から追放しつつも、彼の哲学思想や教育理念は、旧時代の感覚論やヴォルフ派哲学を克服する新機軸として神学大学の教育課程に組み込まれることによってその後の神学大学の思想的方向性を規定することになったのである。

144 История русской философии: Учебник. 3-е изд., перераб. Под общ. ред. М.А. Маслина. М., 2014. С. 166–171.

145 フェオフィラクトは、神学大学に召喚されたばかりのフィラレートに彼が最新文献に無知で古典語や故事にかまけていると注意し、学問上の重要なことは全てフランス語で読めると主張し、彼にフランス語の習得を助言していた。П. М. Из прошлого. С. 500. それ故、フィラレートにとって古代のプラトン重視は、最新のフランス的教養を重視したフェオフィラクトへの反発でもあった。近世の支配層での外国語使用が、近代以降に民族的アイデンティティの勃興を惹起した事情については、ピーター・バーク（原聖訳）「近世ヨーロッパ支配階層の多言語性」『思想』第10号、2013年を参照。

146 ここで「正教」とは何だったのか、という疑問が生ずるかも知れない。本論は、正教を本質主義的に把握するのではなく、外形的には所定の儀礼的実践によってその統一性が担保されつつも、内在的には個別具体的な時代的・場所的状況の中で「正教徒」を標榜する聖職者や信徒の個々の言説によって表現される信仰告白として捉えている。



ところでフェスラーの追放事件の原因を、フランクリン・ウォーカーは、個人の自律を主張したカント主義が専制と農奴制に立脚したロシア文化にもたらした危機への反動として説明していた<sup>(147)</sup>。しかし、フェスラーの哲学授業をめぐる関係者の立場の相違は、むしろ感覚器官による経験的認識を超越した次元にある（カントとプラトンとに共通する）イデア界を哲学的理性の対象として承認するの否かを巡るものであり、学則に「プラトン」が明記され、その後のプラトン主義の伝統が形成されたという結果を見れば、むしろカント・プラトンの自律的理性の契機がロシア神学大学の哲学教育課程に定着したことを意味しており、その意味でウォーカーの説明は近視眼的で紋切り型すぎるといえる。むしろ、感覚器官から受動的に得た経験を認識の主因とみなすアリストテレス的な認識主義と、生得的な理性によって未経験の理念を能動的に具現化しようとするプラトン主義的な実践論との対立において後者が優勢になったと見るべきである。この対立軸から見れば、ヴォルフは前者に、カントは後者に近いものとして位置づけることができる。

他方で、カントが、生得的なイデアによる「神」の直観をめざしたプラトンを「神秘主義の哲学者」と呼び、「神」を直観する神秘的な能力はもはや人間の能力ではありえず、感覚器官の限界を越えられない人間の能力が到達可能なのは「神と来世」に至る限界寸前までだとみなし、「哲学」に固有の領域を現世の被造物の側に押し止めたのに対して<sup>(148)</sup>、プラトンに従ったフェスラーはカントが乗り越え不可能とした境界を超えて「神と来世」の領域に踏み込むことをめざしていた。この「神」と被造世界との絶対的隔絶を認めるのか、それとも両者の合一を希求するのか、というもう一つの対立軸から見れば、フェオフィラクトのフェスラー批判はカントのプラトン批判に類似していた。前者にとって哲学は経験可能な領域に限定されるべきであり、超感覚的な「神と来世」は理性による哲学の対象ではなく信仰に固有の領分なのである。その意味でフェオフィラクトの「新プラトン主義」批判が「異端審問」的な論調になったのも当然だった。

もっともこの信仰の領域を所管するのは教会聖職者か、それとも理性的個人なのか、というまた別の対立軸から見れば、フェオフィラクトは、後者の立場のカントおよびフェスラーに対立する。大主教たるフェオフィラクトはあくまで「信仰」を所管する教会聖職者の視点から「哲学」を観ていたのである。これに対して「哲学」の名の下で超宗派的普遍宗教をめざしたフェスラーは、普遍的理性を通じて、歴史的教会の権威に縛られない対等な友愛関係を重視したのである。

フリーメイソン活動や友人・師弟関係に見られるように、様々な意味で越境的であったフェスラーの人間関係は、自律的な個々人の間で対話的な関係を構築しようとする姿勢に裏打ちされていた。この対話的姿勢もやはりまた「プラトンの」であったといえる。フェスラーの愛弟子ローディは自著『論理学入門』で「自由な対話」を「プラトンの方法」と呼び、それをアリストテレス的三段論法とソクラテス的問答法に対置している<sup>(149)</sup>。自由な対話法は予

147 Walker, “‘Renegade’ Monks and Cultural Conflict,” p. 347.

148 カント（八幡英幸訳）『カント全集 19』岩波書店、2002年、63、73–75頁。

149 Лодий, Петр. Логические наставления, руководствующие к познанию различению истинного от ложного. СПб., 1815. С. 478–479.

め正答が未知のテーマを扱うという意味で発見的・創造的方法であるが、三段論法と問答法は既知の命題を論証・説得するための方法として「学校」的なスコラ学と教理問答という形で具体化されていた。また大主教フェオフィラクトが得意だった説教術も既定の結論へと導くモノローグという点で自由な対話法の対極に位置していたのである。

総じていえば、フェスラーが唱道した「プラトン主義」とは、古代ギリシャ哲学以来の感覚世界を超越した人間に内在する神的アイデアを重視する思潮、ストア派、新プラトン主義、教父哲学、スピノザ、カントを、プラトンの著作の独特な解釈を土台にして総合した異種混交的構成物であったが、その目的は、人類の道徳的完成のために哲学と信仰、理論と実践を統一した全体的な世界観・人生観を構築することであった。神学校委員会が、「プラトン主義」を正教会聖職者養成のための哲学的支柱と規定したことの背景には、神学校委員会メンバーの間の抗争も影響していたが、何よりも大主教・文学教授フェオフィラクトの「反プラトン主義」の役割が大きかった<sup>(150)</sup>。しかし、最も肝心なことは、神学校委員会でヘゲモニーをとった改革者達が、感覚と経験を重視する勢力に対抗して、超越的アイデアを志向するあらゆる思潮の源流としての古代ギリシャ哲学の父「プラトン」を哲学教育の根幹に据えることで、全体としてロシア正教聖職者層の知性の質的転換、すなわちそれ以前の神学校教育での模倣的・他律的知性から創造的・自律的知性への転換を目指したことである。たしかに、「プラトン」の名の下で「理性」と超越的なものへの「信仰」を統一させようとする方向は、逆に既存の「理性」のあり方や「信仰」形態との緊張関係を引き起こすことになるが、同時にそれが神学大学での神学的・哲学的知性を活性化させる原動力となったことも間違いないし、実際にフェスラーの薫陶を受けた弟子達やその後継者達は、「プラトン主義」を自分たちの信仰と思想の表現にとって有益だとみなし、独自のプラトン主義の「伝統」を形成していったのである。

[付記] 本研究は JSPS 科研費 21520739、22320021、25370852 の助成を受けました。また本誌編集委員会および査読者から価値ある助言を頂いたことに心から感謝します。

---

150 ロシア正教会の中での反プラトン主義の潮流はフェオフィラクトをもって断絶したわけではなく、その後も「新プラトン主義＝異教」という認識枠組みは一定の影響をもっていた。その一例としては、*Полисадов В. Христианство и неоплатонизм // ЖМНП. Ч. 77. Отд. 2. 1853. С. 81-277.*

## **Происхождение платонизма в высшем образовании православного духовенства в начале XIX века в России: из истории изгнания профессора Фесслера из СПбДА**

**СИМОСАТО Тосиюки**

Данная статья посвящена истории изгнания И.А. Фесслера (1756–1839), первого приглашенного из Германии профессора Санкт-Петербургской духовной академии (СПбДА), и имеет целью выяснить значение «платонизма» в контексте реформы образовательной системы для будущей элиты православного духовенства России.

До сих пор некоторые исследователи упоминали о деятельности Фесслера с точки зрения истории духовных академий или истории движения масонства в России. Но значение его мысли еще недостаточно выяснено. Ранее исследователи утверждали, что под личным влиянием Фесслера было введено определение приоритета философии Платона в Уставе духовных академий 1814 г. Но есть несколько сложных аспектов во взаимоотношениях между Фесслером и установлением платонизма в духовных академиях. Во-первых, Устав принимался на уровне государственной политики членами Комиссии духовных училищ по делам реформы образования духовенства. Во-вторых, прежде установления этого Устава 1814 г. Фесслер уже был уволен с поста профессора в 1810 г. и давно проживал в Поволжье. Поэтому у него почти не было возможности оказать свое влияние на ход окончательного решения об Уставе. Кроме того, главным поводом для увольнения Фесслера было то, что он отдавал преимущество исключительно Платону при преподавании философии в Академии. Это значит, что в момент изгнания Фесслера платоническая философия еще не была признана в качестве официальной линии православного христианства. Поэтому нужно проанализировать обстоятельства приглашения и изгнания Фесслера для того, чтобы выяснить, каким образом «платонизм» Фесслера повлиял на решение о направлении подготовки духовной элиты Российской империи.

В результате нашего анализа оказалось, что на ход приглашения и изгнания Фесслера воздействовали идейные и политические конфликты между членами Комиссии. Фесслера пригласил М. Сперанский как представитель Комиссии, который отдавал первенство априорному разуму в теоретическом познании и религиозном веровании. Но узнав содержание лекций Фесслера, архиепископ Феофилакт, влиятельный член Комиссии, который отдавал первенство чувственному опыту в познании и веровании, резко критиковал философскую позицию Фесслера как «пантеизм», исходящий из «платонизма». В основе такого мировоззренческого противостояния между трансцендентным рационализмом и эмпиризмом лежала разница между позитивной оценкой философии Канта и непониманием Канта. Кроме того, на судьбу Фесслера повлияла борьба между Феофилактом и митрополитом Амбросием, который оказал Фесслеру поддержку для того, чтобы ослабить влиятельность Феофилакta среди верховного духовенства. В результате столкновений Феофилакт успел изгнать Фесслера, но и сам архиепископ был выслан из столицы. Таким образом, определение преимущества Платона в преподавании философии в духовных академиях имело значение торжества идейного направления Сперанского над сенсуали-

стической позицией Феофилакты. И вместе с тем, академический «платонизм» стал символом церковно-политической гегемонии Амбросия и его союзника Филарета, ректора СПбДА, над их соперником.

В заключение нужно отметить, что Фесслер формировал свой «платонизм» из стоицизма, философских воззрений отцов церкви, спинозизма и кантианства на основе своеобразной интерпретации Платона с целью установить тотальное мировоззрение, соединяющее философию с верой и теорию с практикой для нравственного усовершенствования человечества. Поэтому нам нужно считать принятие Комиссией «платонизма» в качестве официальной православной философии не только продуктом борьбы духовных и светских реформаторов, но и выражением коллективного намерения реформаторов улучшить интеллектуальное состояние православного духовенства России посредством активного восприятия всех идеалистических течений, ведущих свое происхождение от отца философии. И это намерение было реализовано через учеников Фесслера в первой половине XIX века.